

鵠沼

久 久 比 奴 末

はまゆうと桜貝と

海光るわが故里

第 9 7 号

特別寄稿

阿部 昭の鵠沼風景〔上〕 島本 千也 ... 1

長谷川路可 生誕110周年、没後40周年記念特集

カトリック片瀬教会に

長谷川路可の作品を訪ねて 綿谷 克延 ... 16

長谷川路可伝〔下〕 渡部 瞭 ... 19

鵠沼の文化財 中島 明 ... 40

今井達夫遺稿③ 相州大山豆腐塚 今井 達夫 ... 51

「鵠沼を語る会」活動の記録 総 務 部 ... 58

編集後記 62

『新編相模風土記稿』（天保13年、1892）に、「鵠沼村久久比奴末牟良」

とあり、当時は“くぐいぬま”と呼んでいたことが分かる。

鵠 沼 を 語 る 会 発行

アンソロジー

詩 華 集

阿部昭の鵠沼風景〔上〕

島 本 千 也（鵠沼海岸在住）

はじめに 鵠沼の作家・阿部昭

阿部昭が亡くなったのは平成に改まった年の5月19日である。したがって、平成の年号（H20年）が、死後の年数と同じということになる。阿部昭は昭和9年（1934）の生まれだから、健在であれば74歳ということになる。この間、阿部昭のことが話題となったのは、岩波書店が、平成3年より翌4年にかけて「阿部昭集」全14冊を刊行したことと、同じく、岩波書店の「短編



小説礼讃」（岩波新書）が話題になったことぐらいであろうか。阿部昭についての評論は、深谷考の「海辺の人間—阿部昭論」と「阿部昭の時間」の2冊である。

阿部昭の作品として、現在、入手可能な本は講談社文芸文庫の「単純な生活」他数点しかない。阿部昭の死後の年数は、「阿部昭の世界」を風化させたといえるのだろうか。

本論では、阿部昭の文学者（小説家・作家）としての作家論や作品論は意図していない。

阿部昭は小説・エッセーにおいて、自らが生活した土地のこと、鵠沼について繰り返し書いている。鵠沼の「土地の感覚」「土地の気分」は作品の重要な基調となっている。阿部昭の作品の舞台の多くは鵠沼である。

阿部昭と土地・場所（鵠沼・辻堂海岸）の関わりについて、できるだけ彼の書いた文章を道案内に触れてみたいと考えている。阿部昭が「鵠沼」をどのようにとらえていたか、「鵠沼」という場所をどのように表現したか、阿部昭にとって「鵠沼」とは何だったのかという問題に限って話題にしたいと思う。

場所（土地）は、人にいろいろな影響を与える。場所とのかかわりの中で人は生きていく。場所によって人は育てられるというか、場所が人を育むという側面もあるといえる。場所の力、場所の影響力は大きい。とりわけ、阿部昭にとって、鵜沼という場所の影響はは大きかったといえる。

阿部昭は、自らについて

「人気の少ない海辺で育ったことが私の文学の好みを決定的にしたと思う。」「人事の葛藤を追うのが本筋であるべき小説を読んでも、私はその自然描写のほうにまず惹かれてしまうような少年であった」「人間を支配する圧倒的な自然と、同じく悠久の時間とに呆然としたのです」（「夜の海」1989年）というように、阿部昭は、鵜沼の土地に縛られた作家であり、土地を表現するのを好んだ作家であった。田村隆一は阿部昭集第六巻（岩波書店）月報において、「阿部さんの魂と肉体の故郷とも言うべき鵜沼海岸」と言っている。

もとより、作家としての阿部昭にはいくつものテーマがあった。「子供部屋」でデビューして「指令の休暇」「未成年」「単純な生活」などを発表してきた。父との関係を描いたもの、頭に障害のある兄との関係を描いたもの、家族や親族を描いたもの、放送局時代の人間関係を描いたもの、自身の幼年時代や青年期を描いたもの、等、さまざまなテーマがあり、阿部昭の世界は決して狭くない。したがって、阿部昭の世界を、鵜沼の土地に限って、視点を与えることは必ずしも正当ではないかもしれない。

しかし、阿部昭にとって鵜沼の土地は特別な存在であった。阿部昭と鵜沼の土地（場所）をめぐる葛藤はある意味で阿部昭文学の核心であるともいえる。阿部昭がどのように鵜沼を描いたか、どのように愛したか、どのように失望したか、阿部昭の描いた鵜沼、土地との関わりについて触れてみたい。

序章 阿部昭の描いた鵜沼（土地の感覚）

阿部昭の文章は平易な言葉で書かれている。特にエッセーでは、持って回った言い回しや、漢語の多用などは無いといえる。ときに、おしゃれでもある。上品

な文章であるともいえる。代表作の「単純な生活」等は女性誌（「婦人之友」）に連載されたことも関係しているのかもしれない。

阿部昭の文章の中には、怒りや悲しみを含んだものもある。その怒りや悲しみは、決して一人よがりのものではない。常識といえるものであり、多くの人々の共感を得るものである。むしろ、怒りや悲しみを生み出す、周囲の状況こそが異常といえはいえるはずである。独立不羈、普通に生きていくことが困難な現実こそが阿部昭の大きな困難であった。

阿部昭を「湘南の生活スタイル」を描いた作家である、などと評すると、おそらく阿部昭は不満を漏らしたと考えられる。にも関わらず、阿部昭の文章には、湘南の普通の生活を、普通の言葉で表現した強さがあるように感じられる。湘南の風土が生んだ作家といえるのではないだろうか。



片瀬山から鵠沼を経て富士を望む（昭和初期の絵葉書）

鵠沼は基本的に平坦な土地である。西には大磯丘陵、箱根の山陵まで、さえぎるものは何もない。したがって、夏の西日はいつまでも残ってしまう。その点、鎌倉や葉山などは近くの丘陵の山陰となって、早く陽が陰って夕景となる。鵠沼は陰影に欠ける土地である。

「鵠沼や辻堂あたりは西が海に開いた土地だから、新緑の時分はいつまでも日が暮れずに、なにか苛立たしいものがあるのにくらべて、北鎌倉の谷戸では、西側にある山のために、午後の三時になると夏至の頃でも日がかげろ。だから夕暮れとともに落ち着きがくる。そこが海辺の土地と山の谷あいとは違うのだ、と。」

「この土地の夕暮れどきの気分を楽しむことは少ない。〈中略〉暮れなずむ海ぞいの空には、むしろ不安を掻き立てるものがあるように感じられる。」（「芥川龍之介の鵠沼」 原題「たそがれ」1976年）

『「今年はどうやら一度も海にはいらずに終わってしまいそうだ」というと、「こんな海の傍にいて？」と不思議がられるが、案外そんなものである。ちょっとばかり海水が恋しくないでもないが、サーファーの若者男女に占領された砂浜や、あたり一面の塵芥の山などを目に浮かべると気後れがしてしまう。その代わり、海岸の陽射しで、家の中にも結構顔や手足が黒くはなる。

こんなふうに、シーズンオフの到来を、おとなしく、辛抱強く待っている私みたいな海辺の住人もいる。よそから来る人に通せんぼするでなし、その期間家を空けてどこかへ逃げ出すでもない。第一、海辺の夏は実にあっけない。あっという間の短さである。子供の頃、四十日の夏休みが果てしなく長く、それだけでもう一つの別の季節のように感じられたのが嘘のようである。

八月も半ばになると、雲の様子がにわかにならわってくる。私は二階で海のほうを向いて仕事をしているから、（残念ながら海そのものは見えないが）一日湾の上空を監視しているようなものである。すると、それまでよく磨いてあった青空の鏡になんとなし点々と曇りが出てくる。そのうち今度は白粉でも吹きつけたような白味が増してくる。それがもう秋の雲なのである。毎年、この自然のサインを見つけると、今を盛りと夏を楽しんでいる人にはお気の毒と思いつつ、私はひそかに喜ぶ。

この空気の変化と、日中の風の感触におやと思うのは同時のようである。照りつける日はまだまだ衰えないのに、地上をわたる風に冷やっとさせられるのは、熱いお茶に氷を入れて飲むようなもので、身体の内外的感覚が斑になったような、奇妙な具合である。「晩夏」というのはもうあまり流行らないようだが、美しい漢語の一つで、私は言葉も好きだが、季節そのものを好む。猛暑は閉口だが、晩夏はいくら長くてもいいような気がする。』（「晩夏」『エッセーの楽しみ』1986年）

「夏休みも終わると、人の波が退いた海岸は急にがらんとしてしまう。あちこちに塵芥の山がのこるばかりで、浜辺の砂からも熱気が失せ、早や秋の風がしらじらと首すじを吹いて過ぎる。やれやれ、今年もシーズンは終わったか、という感じが、海水浴場のある町に住んでいると、ことのほか強い。」（「浮き雲」『エッセーの楽しみ』1986年）

「快晴の日がつづき、朝に夕に富士の影が浮かび出る、すぐそこに、手にもとれるように。空の青さに誘われて、砂浜に出てみる。波はほとんどなく、なめらかな海面がつやつや光って、その上をどこまでも歩いて行けそうである。真正面に、伊豆の大島がくっきりと見える。太陽はちょうど頭の上にある。雲ひとつない真昼どきである。

波打際を、病氣上りらしく見える老婦人が、娘さんかお嫁さんと二人で貝殻を拾いながら歩いている。向こうのほうから、黄色いトレーニング姿の若者が一人、ゆっくり近づいてくる。人影といったらそれだけだ。湘南の海はいまがいちばん美しい。」（「ふらんす」1986年）

「湘南の海は本当は冬がいちばんで、日没寸前の海面などは異様なほど美しく、息をのむような瞬間がある。夕日に金とも銀とも赤とも紫とも緑ともつかず、ちりぢりに反映し合って複雑に揺れ動いている波間を見て、なるほど印象派というのはこれかと納得したことがあったが、残念ながら私の目の力ではそれ以上のものは掴まえ切れない。」（「修練」『エッセーの楽しみ』1986年）

第一章 阿部昭の作品中（小説・エッセー）の鵠沼

「子供部屋」は阿部昭のデビュー作品である。「文学界」第16巻11号（昭和37年11月1日発行）に発表され、第十五回文学界新人賞を受賞した作品である。（阿部昭集第1巻）阿部昭はデビュー作品の中にすでに鵠沼の土地のことを表現している。

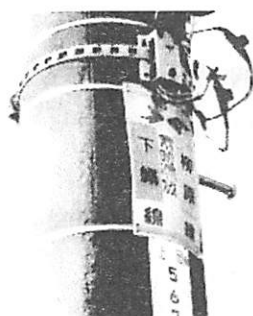
「子供部屋」は精神的な病をもった兄（一成）を、中学生に入った頃の弟の目で見た作品である。兄が横浜の郊外にある、鍵のある病院に入院させられ、見舞

いに行った親子に看護婦が「あなたのお家はどこ？」と聞いたのに対して「それは海のそばにあるのだと彼はぶあいそうに説明した」という箇所と、本人に知られないように、こっそりと部屋を出た母親と主人公に、兄が「帰る！ 鵠沼のうちに帰る」と泣き叫んでいたという箇所である。主人公のいる場所が、「それは海のそばにあるのだ」「鵠沼」という形で特定されている。

その他にも、「海岸の松林」「潮風に吹きとばされてくる叫び声」「海の響き」「自分の足が海にむかって駆けているのに気がついた」「砂山」など鵠沼を連想させる言葉が出てくる。

デビュー作は作家の進路を決める作品でもある。阿部昭は二十八歳の最初の作品から、鵠沼の土地を意識した作品を書いている事になる。阿部昭にとって「鵠沼」はデビュー作以来のテーマになったといえる。

「鵠沼西海岸」(1969年)という短編は、当時、鵠沼西海岸とか字下鰯とよばれた、鵠沼海岸三丁目にあった最初の家での記憶を描いた作品である。隣の家に住む少女との出来事、兄のこと、兄の失踪と死についてなどが描かれている。その作品の冒頭近くは以下のように始まる。



「字下鰯・・・・・・」

ずいぶん古い地名だ。してみると、この電信柱も、きっと三十年から以上昔のものであるにちがいない。

僕はまたそろそろと歩き出した。一このつまらない海辺の町。ここで僕は、なにしろもう三十何年もすごしてきたのだ。三十何年、この波の音を聞きながら、夜は眠りにつき、朝は目をさました。ここは、やっぱり僕のふるさとだ。

この土地を、僕はどんなにか愛し、にくむ。」

講談社文芸文庫版の松本道介氏の解説には、「長兄にささげるレクイエム」といった性格の小説とかかれている。

「沼」(1972年)は鵠沼の地名の由来について触れた作品である。

鵠沼とは「くぐいぬま」のことであり、「鵠(くぐい)」「白鳥」のいた沼地がいたる所にあったことに由来する。阿部昭の子供の時(昭和十年代)の記憶に残された沼が描かれている。現在、沼として残っているのは鵠沼藤が谷の蓮池ぐらいであるが、当時は田圃や沼が鵠沼の各地に残っていた。東屋や益田孝別荘など

には小舟を浮かべる沼があったことは、写真や記録に残されている。もちろん、作品は単なる沼の案内記でも紹介でもない、子供心に沼に感じた未知の領域への関心を描いているといえる。

作品の最後には次のようにある。

「子供のわたしは、沼という文字の恰好や音のひびきに、この土地の地霊のようなものがこもっているのをつねに感じていた。」

「子供の墓」（1972年）は阿部昭作品の中ではよく知られた作品である。某社の高校国語教科書に使われたこともあり、短編作家阿部昭の名前を全国へ知らしめることになった。

夏の日射しの強い昼下がり、2歳の子供を自転車の荷台にまたがらせ、線路の向こう側にある、尼寺（本真寺）を訪れた時の経験を主題にしている。寺では父や母の眠る墓を訪れ、境内の日陰でしばらく過ごし、自宅へ帰ってくるという、変哲もない一時を描いている。当時の阿部昭の自宅から尼寺までは、直線距離にして200メートルぐらいである。阿部家の墓は本真寺の墓地の中でも小田急線の線路寄りにあり、電車の中からでもいつでも視線の届く範囲内にある。真夏の昼下がり、明るすぎる日射しのために陰影さえ乏しく、人影も乏しい。すべての生き物が死に絶えたような静寂がある。

墓地で遊びながら子供は電車を見送っている。電車を見つめる子供の目の中に、繰り返される時間、あるいは、近い将来、自分もその墓地の中に眠るであろう姿を見ていたのではないだろうか。

「川」（1972年）という作品では、引地川と、その川沿いにある、子供のかよう小学校（鶴南小学校）が背景として描かれている。小学校の校長は、かつての国民学校の担任であった教師だった。少年を恐れさせたかつての担任は、すっかり、戦後の民主主義の校長（教師）へ



と変質していた。

「桃」（1972年）という作品は太平台の坂道での記憶が主題となっている。遠い冬の真夜中、母と二人で水蜜桃を買い出しに行った帰りの記憶である。

「冬。真夜中。月が照っている。

子供の自分が、母と桃の実を満載した乳母車を押している。

この町から西隣の町に通ずる畑中の一本道は、なにがし台と呼ばれる小高い砂丘の岡をこえて、ゆるやかな坂道で登り降りする。これは、当時も現在も同じだ。ただ、その頃は、道もせまく、舗装されていず、石ころだらけの山道で、両側は深い松林、人家もしばらくとぎれた。

その坂道を、いま、母と静かに下ってくるところだ。やがて、この坂を降りきれば、川にさしかかり、川のゆくては海、木橋の向こうは一面の田圃で、食用蛙の牛のような啼き声や、ふつふつという田螺のつぶやきがあたりの空気をふるわせている。もうすぐ、家に着く。」

桃の季節は夏である。しかし、記憶は「冬。真夜中。月が照っている。」として刻印されている。記憶に整合性がない。芥川龍之介の「蜃気楼」のような謎とつか非現実的な作品である。戦前期、桃は湘南地区の名産であった。藤沢、茅ヶ崎、平塚など線路沿いに桃畑が広がっていた。戦争中に食料増産のかけ声で多くの桃の木が切られ、いも畑へと変貌したと伝わる。

「父と子の夜」（1972年）の中には家族で海岸のサイクリングコースを走る情景が出てくる。

「その夏、わたしはくる日もくる日も暇さえあれば海辺のサイクリングコースを走った。わざわざ日中の炎天の時刻をえらんで走った。自転車専用の細い舗装路が、海岸線ぞいに砂浜とドライブウェイにはさまれて、わずかに起伏しながらほぼ一直線に伸びている。その果ては熱気にかすんで見えない。終点まで行って帰ってくると往復二十キロあった。」

ある朝、そのサイクリングへ一家そろって走ろうと声をかける。これまでも何度か提案したが、子供たちは否定的であった。今度も長男の一郎は拒否する。そのいやがる長男を無理矢理引っ張って出発する。「父と子の夜」の最後の場面である。

「短い形式」(1972年)というエッセーの中には次のような文章がある。

「戦前の姿を比較的好くともめていた別荘地の鵠沼、戦争下では疎開地でもあった鵠沼は、外来者にとっては相変らず大衆的な海水浴場であり、それには戦前も戦後もなかったからである。古くから住んでいる人間の目には、この土地での季節の交代にはたった一つのパターンしかないようなものだ。シーズンとシーズンオフ — あっけない夏の二た月がすぎてしまうと、あとはすさんだ空虚がただよう。冷やかな鋼色の海、さびれてまた草叢の下に消える砂の小径、閉ざされた娯楽場、……といったものに、子供の私はいつもその空虚感をかきとって胸がいたんだものだ。」(1972年)

「水のほとりで」(1975年)というエッセーには鵠沼海岸の山口屋(酒店)前から西を見た光景が遠い記憶として描かれている。

「北側の窓から見ると、夕ばえで西の山なみの線がハッとするほど追ってきて、こんな海辺の町ではない何百キロもはなれた山奥の盆地にでもいるような錯覚におちいる。だがちょっと首をめぐらしたとたんにその幻想はこわれる—磨りガラスにでも映したような青ぐろい夏富士がちゃんとあそこに控えているから

それで私は思い出した……昔住んでいた家から子供の足で十分ほどのところに山口屋という小さな雑貨屋があり、そのわきに汚い郵便ポストが立っていた。夕方よく使いで葉書などを出しにやらされた。その山口屋の角から田圃ごしに西の山の空を見ると一面に広がっていた夕やけ、そいつが私の頭のなかではいつも絵本の夕やけのページとごっちゃになっていたことを思い出したのだ。」

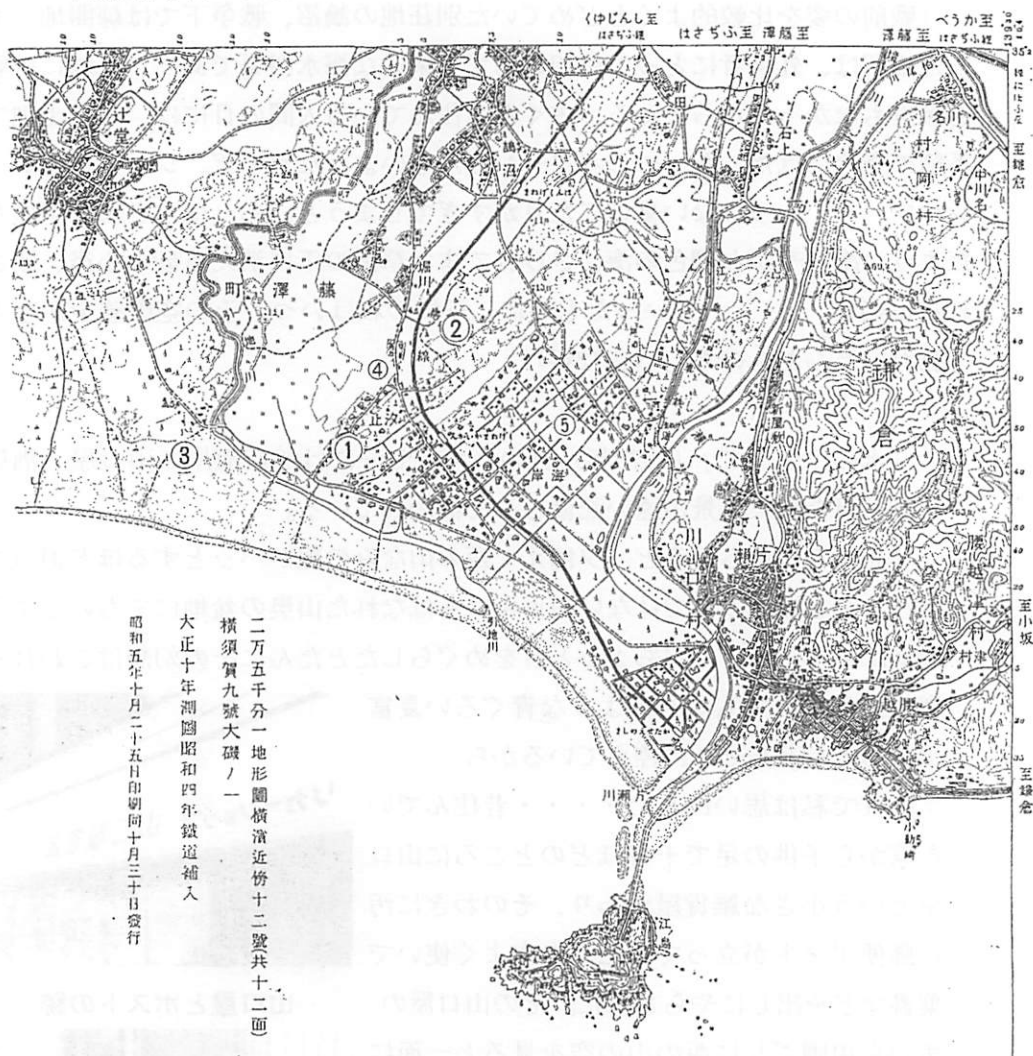


山口屋とポストの跡



近藤信行は「阿部昭集第十一卷月報」において、「彼の作品には、つねに湘南鵠沼の風景があり、波の音や松林のさざめきがある。そこに人間の生きた姿がうつしだされ、人生にたいする感動の声がつたわってくる。」と書いている。

阿部昭の住んだ家



二万五千分一地形圖横濱近傍十二號共十二面
 横須賀九號大磯ノ一
 大正十年測圖昭和四年鐵道補入
 昭和五年十月二十五日印刷同十月三十日發行

- ① 字下鰯の最初の家 (鶴沼海岸3-10-17)
- ② 松が岡五丁目の家 (松が岡5-3-20)
- ③ 辻堂東海岸の家 (辻堂東海岸4-11-3)
- ④ 新婚時代住んだ家 (鶴沼海岸7-15-13)
- ⑤ 富士山医師の隣家の借家(松が岡3-8-26)

地図は大正十年測図、昭和四年鉄道補入の二万五千分の一の地形図である。
 阿部家に移り住む十五年前のものであるが、最初の家(字下鰯)の西側には、ほとんど人家は見られない。わずかに、辻堂道の途中に数件の家屋が見られる程度である。

第二章 阿部昭の住んだ家

① 字下鰯 最初の家

阿部昭の出生は広島市である。海軍軍人である父の任地の一つ、広島市（現中区）白島中町に昭和9年9月22日生まれている。父、阿部信夫、母、ハル。父方は愛知県の岡崎藩士の出。母方は大阪市西区土佐堀裏町の旧萩藩士の娘である。長男、亥之介。次兄、新がおり、男三人兄弟の3番目であり、父42歳の時の出生である。父は海軍大佐で敗戦。父の兄弟（叔父）にも海軍兵学校出身者が六人おり、自らも漠然と、海軍へ行くことを感じていたという。阿部昭と海は生まれながらにつながっていた事になる。生後半年で、父の任地の関係で藤沢鵠沼に移り住むことになる。

「昭和九年九月に広島で生まれた私は、翌十年の春先、父が海軍省に転勤になったのを機に、両親、二人の兄、女中とともに、汽車に揺られてはるばるこの海辺の町にやって来た。神奈川県高座郡藤沢町である。」

藤沢に来た最初の日、駅前にあった旅館「角若松」に泊まっている。あくる日から借家探しをしている。しばらく借家暮らしをし、昭和10年12月に神奈川県高座郡藤沢町字下鰯の新居に落ち着いている。現在の藤沢市鵠沼海岸3丁目10-17（辺）である。ここに大学1年の夏まで過ごすことになる。

「鵠沼に三十何年、住んでいる。生まれてすぐにここにつれてこられたのだから、人心地がついたのもこの海のほとりであった。（中略）その間いちばん長くいたのは、今では西海岸と呼ばれている字下鰯という、ごく海岸に近い一角であった。そこで十数年、波の音を聞きながら少年時代を過ごした。その魚くさい地名は、朝な夕な、地引網を曳きに家の前をぞろぞろと通って行った、老若男女の漁師達のことを思い出させる。幼い僕には、あらくれた彼等の半裸姿が、絵本に出てくる赤鬼のように、おそろしかった。

その時分の鵠沼は、そうした半農半漁の土着の住民を除いては、海水浴場のある避暑地であるか、病人をかかえた一家の転地先であった。僕のおやじが昭和の初年に家を建てた頃は、あたりいちめんスイカ畠であったという。砂地の

せいか、夏は蚤が多かった。

僕の家のおそばには「芥川さん」の家があった。」（「鵠沼海岸」）

「芥川さん」の家というのは、芥川龍之介の妻の実家の別荘である。

鵠沼には江戸期以来の旧村としての地区と、明治期以降開発された別荘地としての二つの地区があった。旧村地区は海より内陸部にあり、堀川、原など九つの大字を形成していた。

一方、別荘地地区は江ノ島電鉄（江ノ電）鵠沼駅から開発が始まり、現在の松が岡地区（1～3丁目辺）が中心であり、昭和四年、小田急江ノ島線が開通して以降、鵠沼海岸（1～3丁目）地区が開発されるようになった。阿部昭の自宅の建った字下鰯（現、鵠沼海岸3丁目）は堀川地区のもっとも海よりの地区、昭和期に入って開発された地区である。

松が岡の別荘地や鵠沼海岸地区には、実業者や株屋等の別荘が多く、大正12年の大震災後、海軍軍人なども多く移り住むようになった。



←現在の鵠沼海岸3丁目10-17辺り

字下鰯の家は、海軍大佐の住まいにふさわしい敷地と部屋数をもった家であった。その家は小説「未成年」のなかに描かれている（もちろん、小説であるから、現実の正確な再現ではないとして）。女中部屋や子供部屋があり、戦後になって、家計の足しにするために数人の下宿人を置くことも可能であった。

短編小説「沼」の中に、「御殿」と「お屋敷」の違いについて、地元の女按摩の口を借りて説明している。敷地の中に沼があるのが「御殿」。「御殿」は洋館の場合もあり、松林やテニスコートなどもあった。一方、俸給取りの職業軍人である阿部家などは「お屋敷」であった。「お屋敷」である阿部家には、空いた部屋がいくつもあったが、それは父が留守にしているせいなのだと少年（阿部昭）は考えていた。

⑤「言葉ありき」の中に「富士山（ふじたかし）内科小児科医のその隣にすんでいたことがある」と書かれている。富士内科医院は松が岡3-8-26（東仲通り）にあり、芥川龍之介の作品の中にも登場する医師である。おそらく、昭和10年春

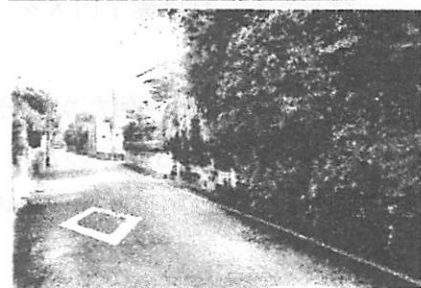
先に藤沢へ来て、12月に新築の家屋が完成するまでの、借家住まいがこの家なのではないだろうか。

② 松が岡五丁目の家

「私が大学に入ってから結婚するまでの数年間を過ごしたその家は、以前よりももう少し陸に入りこんだ場所で、畑地と松林にかこまれた野中の一軒家みたいなものだった。敗戦のどさくさに東京の金持ちの家具商が、闇ルートで材木を信州から引いてきて俄か普請したという怪しげな素性の家で、水道もガスもなく、しじゅう雨漏りと隙間風になやまされた。」（「短い形式」新鋭作家叢書 『阿部昭集』 河出書房 1972）

二度目の家は（藤沢市鵠沼松が岡5丁目3-20）、最初の家と比較すると、建て付けも悪く、部屋数も少なかった。小田急江ノ島線の本鵠沼駅と鵠沼海岸駅の間に位置して、第二次大戦後になってようやく開発された場所であった。阿部家の戦後は、一種の没落家族であった。父は復員後ほとんど定職を持たなかった。この家は、今でも現存しており、鵠沼小学校グラウンドの角から2軒目の家である。

「海からは一、五キロの地点」と自ら記している。 藤沢市鵠沼松が岡5丁目3-20の家→



1953年4月、19歳、この年、東京大学教養学部文科Ⅱ類に入学している。転居はこの年の8月末であった。

1960年、26歳の年、阿部昭は結婚している。結婚式は江ノ島水族館の近くにあった「海浜ホテル」で行っている。結婚後は、実家の近くの借家に10カ月ほど住み、その後は、実家を建て増しして住んでいる。

④「道」という作品のなかに、結婚後しばらく住んだ借家の事が記されている。

「沼田のところは、この辺の百姓家によく見られる、前庭、母屋、納屋、家

畜小屋・・・という型通りの構えで、昔は母屋の屋根が藁ぶきだったのが、今では瓦になっている。その南側の空き地に建てた新築まもないと棟が貸家に
出たのだが、これは上の娘にむかえた婿養子の大工が建てたものだった。裏の
勝手口を出たところがすぐに大工の作業場になっており、朝昼晩と電気ノコギ
リや電気カンナの騒音になやまされる仕掛けだが、家そのものは小ざれいにこ
しらえてあった。六畳二た間に、台所、風呂場も付いて、まずは共稼ぎの新婚
向きだった。私は下見に行って、あっさり入る気になった。」



この「沼田」の家とされるいえの入り口には馬頭観音があ
ったと回想されている。現存する馬頭観音で見当をつけると、
鵠沼海岸7-15-13(神原工務店)である。

←馬頭観音は生け垣に隠れて現存している

結婚後も鵠沼に住んだ理由について、短編「贈り物」の中
に次のように書いている。

「一つには、他に行くところがないから、二つには、何だか自分でもよく判
らない不思議な引力でこの土地に縛りつけられているらしいのだ。そして正直
なところ、私は妻子四人をつれてどこかへ、引っ越すのも億劫なだけなのであ
る。」

二つ目の理由、「何だか自分でもよく判らない不思議な引力でこの土地に縛り
つけられているらしいのだ。」というのが、阿部昭らしい答え方である。「土地
の引力」こそ、阿部昭の一つの重要なテーマでもあったからである。

③ 辻堂東海岸の家

1971(昭和46)年10月1日付で、阿部昭は12年7カ月在職した東京放送(TBS)
を退職している。それまでは、日曜作家並に、台所のテーブルで休日や深夜に行
っていた創作活動が困難になってくる。作家として、筆一本で生活していく決意
の表明であった。

1972(昭和47)年3月、藤沢市辻堂東海岸4丁目11番3号に、仕事のための仮の
住まいを造り、自宅と仕事場との間を自転車で行き来する生活に入っている。

仕事場は、

「当時は一望の松林であった一角にあり四季を通じて猛烈な潮風に曝される。
一人籠城している真夜中など、灯台守のように心細く思えたが反面、そんなむき

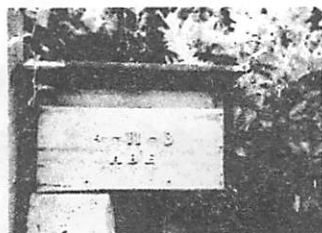
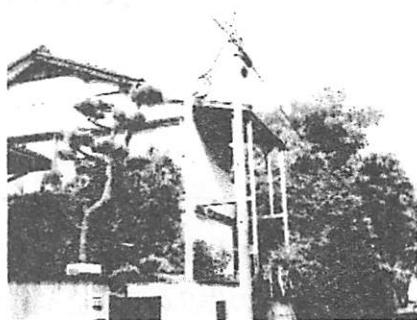
だしの生活が快適でないこともなかった。（「記憶と回想」『全作品の余白に』）

1976(昭和51)年、一家の生活の本拠を辻堂東海岸の家に移している。

「さて、わたしがいま住んでいるのは、波打際まで三百メートルぐらいで、歩いて二、三分の場所である。

この界限は、いまでこそ人家が立てこんできたが、ほんの三十年も前には、防風林の松林が切れ目なくつづくほかはおよそなにもない土地であった。」

「わたしのようには海のそばに住んでいると、朝夕に浜辺を散歩したりしているように思われがちだが、実情はその反対で、全然そんなことはない。海鳴りがするたびにいまさらしく海が近いことに思いをはせるぐらいで、海そのものを眺める機会はないものだ。」（「沈んだ船」）



辻堂東海岸4丁目11-3の家

「性に合う辻堂海岸の空気」というエッセーに、辻堂の家のことが記されている。

「藤沢市に住んで五十三年、そのうち四十年は鵠沼にいた。だが、昔は松林と原っぱばかりだった鵠沼も、だんだん建て込んで住宅地として整備されてくると、私には面白くなくなった。そこで、まだ少しでもそんな面影を残している辻堂の、それも海のすぐそばへ移った。三つ子の魂百までか、私にはやはり砂地と、強風と、海鳴りと、三拍子揃った、荒涼たる空気が性に合っているらしい。」（『はまぎん』1988年、5号12月発行）

以上、阿部昭の住んだ3カ所（4カ所）の家を線で結んでも、一边は2キロほどの世界である。阿部昭の世界はほぼこの枠の中に収まっているといえる。阿部昭は、鵠沼（辻堂海岸）の地を定点観測のように、場所を移動せず、自らの世界を形成していったといえる。（つづく）

（しまもと かずや 神奈川県立茅ヶ崎西浜高等学校教諭）

カトリック片瀬教会に

長谷川路可の作品を訪ねて

綿谷 克延（会員）

6月10日（火）例会終了後、当会会員の有志一行16名が参加して片瀬川沿い山本橋脇にあるカトリック片瀬教会内に掲示されている長谷川路可画伯が描いた宗教画の作品の見学会が行われました。



教会の外観

会誌『鵠沼』に長谷川路可伝を連載中の渡部瞭会員の解説によれば、この教会は鵠沼に避暑に訪れたカトリック・ヘンリック神父と出会った旧家山本庄太郎が自邸を宿として提供した縁で大正8年頃邸宅の一室を仮聖堂としてミサが捧げられるようになりました。その後、敷地の一隅に一堂が建立されたものでキリスト教の教会としては大変珍しい反り屋根、

入母屋造り瓦葺の純和風の寺社建築様式で建てられています。破風の懸魚のかわりに十字架が掲げられていてキリスト教会であることを示しています。会堂内は当初は畳敷きであったそうですが現在は板敷き椅子式に改造されています。

長谷川路可（本名：龍三）は鵠沼ゆかりの画家ですが叔母が女将をしていた東屋という旅館で母とともに少年時代を過ごしました。東京の暁星中学時代に洗礼を受け、東京美術学校日本画科に進み松岡映丘に師事し、院展、帝展に入選。卒業するとすぐにフランスのパリに留学しました。帰国後も鵠沼に住み、新婚生活を送っていますが、のちに東京にアトリエを構え引っ越ししました。

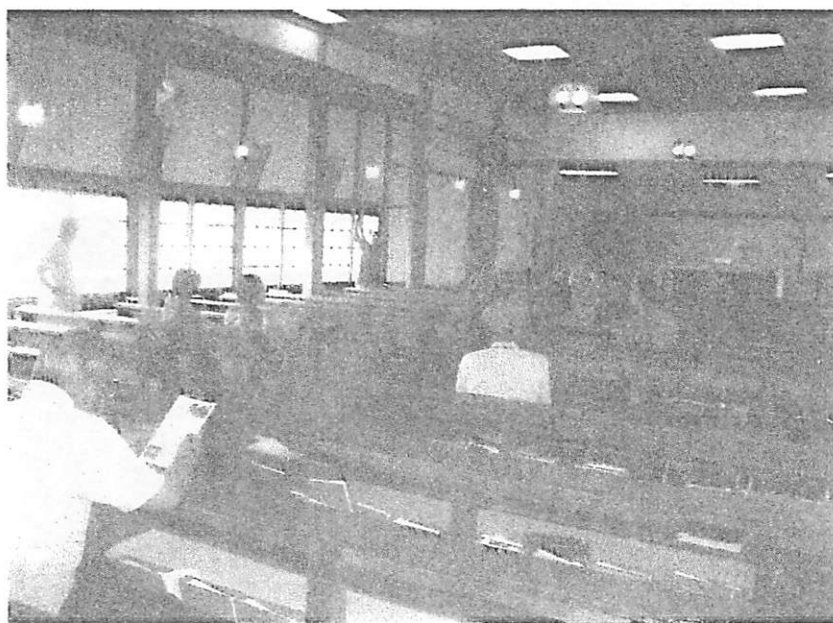
41歳のとき片瀬ヨゼフカトリック教会（現在はカトリック片瀬教会と呼称されている）献堂に際して「十字架の道行」色紙14枚を奉納しました。それらは会堂の両側壁の窓の上に各7枚ずつ額装されて飾られています。

絵の内容は

- ① イエス、死刑の宣告を受ける

- ② イエス、十字架を担わされる
- ③ イエス、はじめて倒れる
- ④ イエス、み母に会う
- ⑤ イエス、クレネのシモンの助力を受ける
- ⑥ イエス、ヴェロニカより布を受ける
- ⑦ イエス、再び倒れる
- ⑧ イエス、エルサレムの婦人らを慰める
- ⑨ イエス、三たび倒れる
- ⑩ イエス、布を剥がされる
- ⑪ イエス、十字架に釘付けされる
- ⑫ イエス、十字架に死す
- ⑬ イエス、十字架より下ろされる
- ⑭ イエス、墓に葬られる

以上、イエスの捕縛から受難埋葬まで 14 の場面が描かれています。



聖堂の内部を見学する会員

また、聖堂正面に向かって左側には日本画絹本彩色軸装の「エジプト避行」(1939 年作) 生まれたばかりのイエスを連れた聖母マリアとヨゼフの三人がエジプトにのがれる様が、右側には同じく日本画絹本彩色軸装の「聖家族」(1946 年作) 新約聖書第 2 章にある 12 歳を迎えたイエスとその家族が描かれています。

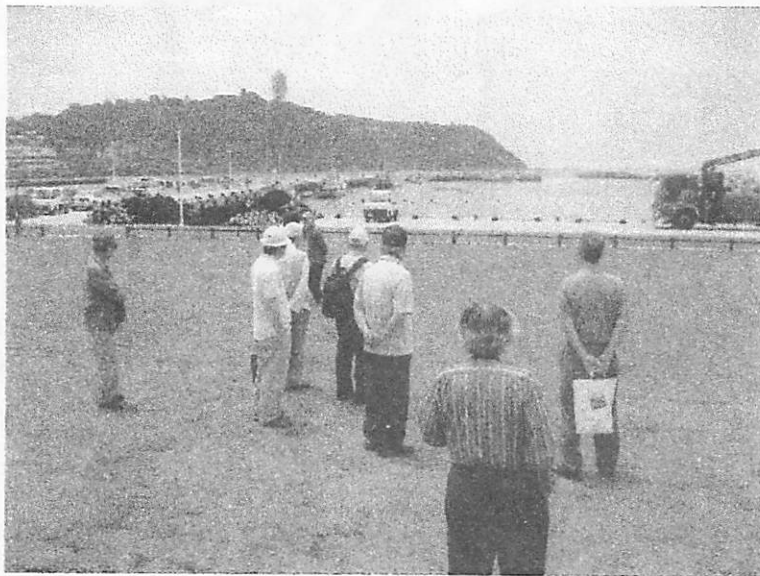
この教会にはもう一点、日本画絹本彩色軸装の「ルルドの聖母」という絵があるのだそうですが当日は展示されていなくて残念でした。

マリオ・バラエロ神父に案内されて別棟の司祭館へ。玄関ホールに日本画彩色扇面が飾ってあり見せて頂きました。これも路可の作品で「切支丹往来伝道図」とでもいいましょうか、街頭で三人の黒衣の僧服の神父が一人は片手に十字架を高々とかざし、一人はロザリオを掲げ、一人は聖書を開いている。それを袴を着た武士や小姓や供侍が手を合せて拝んでいる。家からは女子供が物見高にその情景を見ている。小品ながら素晴らしい扇面でした。

これで長谷川路可画伯の宗教画の見学をおわり、神父にお礼のご挨拶と参加者各自ワンコインづつの献金をして教会を後にしたのでした。

＊

カトリック片瀬教会から歩いて新装なった片瀬漁港に行きました。ひろい芝生や遊歩道のような防波堤、昼時のせいか漁船は出払っていて見当たりませんが、覗き込む海面には小魚の群れが遊泳していて水質はかなり向上しているのでしょう。



整備された片瀬漁港を見る

戦前に立っていたという乃木將軍の銅像の台座礎石が駐車場のそばにあり、説明板が立ててありました。また、この台座には二百三高地から持ってきた石が使ってたったそうですがその石は今、江ノ島の児玉神社に置いてあるとの事です。

ここで現地解散、楽しい見学会を終了しました。 (わたや よしのぶ)

長谷川路可伝(下)

渡部 瞭(会員)

帰国 イタリアで還暦を迎えた長谷川路可は、彼の地での仕事に区切りをつけて、1957(昭和32)年8月末、羽田空港に降り立った。[右写真]

1950(昭和25)年の聖年を期して渡伊して以来だから、足かけ8年、働き盛りの時期をイタリアで過ごし、そのうち6年間はチヴィタヴェッキアの壁画のために費やしたことになる。

路可は帰国早々、9月15日付けの朝日新聞に「壁に向かって六年間」と題する帰朝報告をしたためている。「面壁三年」をもじり、その倍も壁に向かっていた時期の孤独に耐え、創造の喜びに満ちた日々を、極めて要を得た簡潔な文章で綴ったもので、当時イタリアで開発されたストラッポという壁画保存技術を学んだことを紹介し、日本における古墳壁画を含めた保存について提唱していることは注目に値しよう。

1956(昭和31)年の経済白書は「もはや戦後ではない」と記し、一種の流行語にもなっていた故国の姿は、「今浦島」路可の目にはどう映ったであろうか。

9月、新学期を迎えた文化女子短期大学へ復職するとともに、一方、各種雑誌・新聞等への寄稿も数多く手がけるようになった。帰国した年には「ローマの女と旦那たち」(『文藝春秋』11月号)、「壁画・宗教・芸術」(宮本三郎と対談『美術手帖』11月号)「グレコとファッツィーニ—現代イタリアの美術界」(『みずゑ』546・548)、「阿部真之助対談—壁画を描く因縁—ストラッポ会得」(『週刊サンケイ』)といったイタリアでの体験に基づくものが中心である。一方、秋には「松本亦太郎博士生誕百年の集い」が開かれ、「敦煌壁画模写のいきさつ」と題するスピーチを行い、録音テープが遺っている。



シロン号沈没事件 こうした矢先、路可を大いに落胆させる悲劇的な事件が起こった。壁画資料・滞伊中のスケッチ等を積んだ英国船シロン号がスエズで沈没したという知らせが届いたのである。

この事件のちょうど1年前に起こった第二次中東戦争は、エジプトのナセル首相によるスエズ運河国有化計画に対し、この運河を利権として、莫大な通行料収入を得ていた英仏両国政府がイスラエルを巻き込んでエジプトに侵攻してスエズ

昭和32年11月6日

水曜日

算月

華斤



自宅でガッカリして帰る長谷川路可爾伯

嘆きの長谷川画伯

作品を積んだ英船沈む

イタリヤのユニークな博物館の
船が運ぶた荷物は木箱が四
つ、開くと箱の中は六十冊入
つていた。セーヌ川のほとりの古
本屋、ローマの石炭の露の小さな
店、ロンドンの博物館のくすんだよ
うな旧書店、一の二冊もはつき
り見出さるゝのはかりだといふ。
この本は日本ではあつた人、京都
でもあつたものはかり、傳説は何
十方向を向くものがない。
しかし、それをも増してカッパ
リシのは、傳説したる間と
れませんでした。よその人かゝるの

海に消えた七年の労作

蘭館通商の爲、蘭中の貴族を伴ひて艦を明くたむ各船をスケケツシ在下船、蘭國使節の御覽、御覽をすつかりあつてしめた。去、蘭日使蘭國使に屈いた通譯で、こゝとの蘭使を領方官に御シロン号（約九ノ丁）が船員共五ノ丁にルヤ一のタンカーにまつたて就んだといふせがあらつた。同國使は五ノ丁一もう一處乗り直しと云つていたが、七年間の航行を終つて、返すがに返さるゝめ切れない口ふらつた。

知り合ひもあつたので、今日は、お
わびに振舞つたところです。
國慶をやるわけにはいかないの
で、来年の秋までには日本で初の
プレスコートの創製を確くすに
がら張つてなほしよう。

運河地帯の確保を画策した戦争である。これに対しエジプト軍は艦船を運河に沈めてバリケードを築いた。英仏が連合国として賛成すると考えていたアメリカ合衆国は、冷戦で対立していたソ連とも手を組み、停戦と英仏イスラエル軍の即時全面撤退を通告した。こうして英仏イスラエル対米ソエジプトの対立関係が生まれた。ここで、カナダのピアソン外相が、PKOの提案を国連にし、停戦に漕ぎつけた。結果、英仏はエジプトでの利権を失い、米国の発言力は増し、アラブ世界に面目を施したエジプトは、翌年4月にはスエズ運河の通行を再開した。

スエズ運河再開の半年後、シロン号沈没事件は起きた。原因はベルギーのタンカーと衝突したからとされている。しかし、船は英国船、場所が場所、時期が時期である。未処理機雷の存在とか様々な推測もなされているようだが、事実是不明のままである。

いずれにせよ、ジェノア港から積み込まれた路可の木箱には、苦勞して入手した60冊の壁画研究書や資料、帰国後の個展を楽しみに制作した滞伊中の作品35点などの他に知人から依頼を受けた品々が入っていたが、すべてスエズ運河の藻屑と消えてしまったのである。

服飾史教育者として 翌1958(昭和33)年度からは、新たに武蔵野美術学校本科のデザイン科講師に迎えられ、昭和女子大学短期大学部、日本女子大学へも出講、服装史を担当することになった。この時代、この分野を担当できる専門家は少なかったのかも知れない。

2004年の鶴沼郷土資料展示室での展示に訪れたこの時代の教え子(どの学校かは聞きそびれた)のお一人によると、「路可先生の授業はお話がお上手で、ノートを取るのも忘れて聞き惚れてしまった。板書の絵も達者で、流石と思わされた。」という。女子学生から圧倒的な人気だったことが想像できる。

この年の11月には文化学園の招きで初来日したフランスの新進デザイナー=ピエール カルダン Pierre CARDIN(1922-)の案内役を引き受けたり、実演講義の通訳をするなど活躍した。

なお、カルダンは1961年に再来日し、文化服装学院の名誉教授に任命された。



文化学園にて カルダン(中央)と路可(右)

壁画作家として 帰国後の路可の制作活動は大きく変化した。これまでの日本画家(絹や紙に岩絵の具で描く)という側面は見られなくなり、フレスコ画家、壁画作家＝長谷川路可に変身したのである。手法としてはフレスコに加えてモザイクという技法が加わった。

本格的なモザイク壁画の作品としては、1958(昭和33)年に新築された山口県岩国市庁舎吹き抜け部分を飾った『繁栄』という名の縦2.9m、横9.3mの作品が第1号である。これは全面モザイクではなく、コンクリート打ち放しの壁面に大理石を埋め込む手法で、学生2人と地元の業者との共同制作という形を採った。

この市庁舎の設計は、地元出身の建築家で大隈講堂の共同設計者、建築音響学の先駆者として知られる故佐藤武夫(1899-1972)で、路可とは旧知の間柄という。

壁画制作の経緯としては、佐藤が路可に依頼したという説が一般的だが、山口新聞の報道によれば「旧庁舎建設中の1958(昭和33)年、庁舎設計者の岩国出身の建築家、佐藤武夫氏のところへ、ローマから帰った長谷川氏が訪れ“フレスコ画を描きたい”と申し入れた。佐藤氏からは“大理石の本物のモザイク壁画を描いてください”と依頼され、新興岩国市の繁栄をテーマに制作した。」とあり、路可が佐藤に、しかも最初はフレスコ画の制作を申し入れたことになっている。

実は、この情報はごく最近(今年の8月12日)入手した。

市庁舎の老朽化による2001(平成13)年芸予地震での損傷が契機となり建て替え計画が進められ、2005年から具体化したのが、当初入札者がゼロだったことが話題になったりした。1999(平成11)年度から始まる「平成の大合併」の最終段階で、山口県岩国市と同市を取り巻く旧玖珂郡の8町村が2006(平成18)年3月20日に合併を行った。結局合併後に本格的に建て替え計画が練り直されるが、その際に問題となったのは「路可の壁画の運命や如何に？」ということである。

2008年5月13日の中国新聞によれば、「長谷川氏の長女や市民からも“貴重な壁画をぜひ残してほしい”との要望があり、市は“作者に配慮して保存を決めた”という。長谷川路可氏の研究者で崇城大(熊本市)芸術学部の有田巧教授は“部分的にでも残す市の対応はよかった。全国的に公共施設の建て替えで芸術作品が失われており、保存へ向けた契機になると思う”と評価している。」とある。

保存は壁画全体ではなく、緑の樹木に鳥たちが戯れる姿を描いた壁画の中心部(横2.2m、縦2.6m、重さ約2.6t)を切り出し、市が旧庁舎跡地に整備する公園での展示に向け保管するという。この作業は2008年8月中旬に進められ、既に完了した。

こうして長谷川路可のモザイク壁画第1号は、記念碑的な形であるにせよ、かろうじて保存が図られることとなった。

その契機は、先ず長女=百世さんや有田巧教授の働きかけがあり、岩国市民の要望が重なって市側を動かしたことが読み取れる。

続いて1959(昭和34)年、熱海の老舗旅館《古屋旅館》の大浴場に『宇宙神話』と題するフレスコ壁画を制作した。これには学生数人も制作に参加した。

古屋旅館は、熱海七湯のひとつである《清左衛門の湯》源泉を所有し、江戸時代から続く高級老舗旅館である。路可は大浴場の壁画としてギリシャ神話にヒントを得てこの『宇宙神話』を描いた。浴場の壁面はフレスコ保存の条件としては決して良い環境ではないが、画面そのものは案外保たれた。しかし、カビの害もあり、改築に際して取り壊され、現在は見ることができない。

2004年の鶴沼郷土資料展示室の展示に際して同旅館から提供を受けた古いリーフレットや正面写真、下絵などによれば、高さ約3m、幅は約24mに及ぶと思われるかなり長大なもので、20人の男女と馬やイルカ、怪獣などが描き込まれている。

フレスコ画家=長谷川路可として 先述のシロン号沈没を報道した朝日新聞の記事は、帰国後の個展を楽しみに制作した滞伊中の作品35点が失われたことを紹介し、最後に「長谷川画伯の話」として、「画家をやめるわけにはいかないので、来年の秋までには日本で初のフレスコ画の個展を開くようにがんばってみましょう。」という言葉で締めくくっている。

この発言通り、翌1958年11月に日本で初のフレスコ画の個展が開かれた。会場はヴァチカン美術館のポンペイ壁画等の模写を依頼した石橋正二郎の《ブリヂストン美術館》である。『山幸彦の物語』、『イタリアの思い出』等のフレスコ画の手法を用いた作品が展示された。これ以後、壁画はもとより展覧会に展示される作品の多くがフレスコで描かれる。また、モザイクも時に用いられたが、伝統的な日本画や油彩はほとんど例外と言っていい存在になって行く。

戦前の「官展」の流れを汲む文部省主催の公募美術展は、戦後の1946(昭和21)年には、《日本美術展覧会》(日展)として再出発し、1948年に日本芸術院主催、さらに1949年からは日本芸術院と日展運営会共催となる。この段階で開かれた第5回《日展》に、路可は『聖母子』[日本画]を出品したことは、すでに〔中〕で紹介した。

そして1958年からは「社団法人日展」が運営者となり、これにより官展でなく

なっているが、《日展》の名は引き継がれた。ここからの再スタートした《日展》から第1回と数え直されている。(2007年には、1907(明治40)年「官展」の第1回《文展》として初めて開催されてから100周年にあたるとして、会場を上野から六本木に2007年1月21日開館した《国立新美術館》に移しているから、どうもややこしい。)

その1年後、1959(昭和34)年11月に開かれた第2回《日展》に、路可はフレスコ画の『シニョリーナ=マヌカン』を出品した。いかにも服飾史の専門家らしいモチーフを選んだものだが、他には余り類例はなさそうである。この作品は、後に『ファッションモデル』と改題され、現在も文化学園に飾られている。

オペラ『細川ガラシア』 翌1960(昭和35)年5月27日～28日に文京公会堂で《国民歌劇協会》第20回公演として上演されたオペラ『細川ガラシア』の衣装考証および舞台美術監修を長谷川路可が担当した。カトリック美術の第一人者であり、服飾史の専門家であった路可にとって、まさに打ってつけの仕事といえよう。

この作品は、1923(大正12)年にイエズス会神父として来日し、上智大学学長も務めた^{ヘルマン・ホイヴェルス}Hermann HEUVERS神父(1890-1977)の戯曲を、1926(大正15)年サレジオ会神父として来日し、86歳で帰天するまで日本のカトリック文化(ことに音楽と出版)に多大な功績を残した^{ドン・ヴィンチェンツォ・チマツティ}Don Vincenzo CIMATTI神父(1879-1965)が1939(昭和14)年に作曲したものである。1940(昭和15)年1月にミュージックドラマとして日比谷公会堂で初演され、以後大阪、盛岡、横浜で上演された記録がある。

これを戦後になって歌手で演出家の神宮寺雄三郎の企画推進、塚谷晃弘(1919-1995)編曲により4年がかりでオペラ化され、この1960年の公演がオペラとしての初演だった。以後1965年(この回は路可の衣装考証および舞台美術監修の記録あり)、1966年、1967年に、いずれも《国民歌劇協会》が東京で公演をしているから、ここまでの美術は路可の手が及んでいるものと思われる。

菊池寛賞 「伊太利チヴィタヴェッキア修道院に於ける日本二十六聖人殉教大壁画の完成により」という功績を認められ、長谷川路可は1960(昭和35)年の第8回〈菊池寛賞〉を受賞している。同賞は《(財)日本文学振興会》が授与するもので、菊池寛ゆかりの文藝春秋社が担当している。

同社の解説によれば「菊池寛賞は、故菊池寛が日本文化の各方面に遺した功績を記念するための賞で、昭和27年に制定されました。同氏が生前、特に関係の深

かった文学、演劇、映画、新聞、放送、雑誌・出版、及び広く文化活動一般の分野において、その年度に最も清新かつ創造的な業績をあげた人、或いは団体を対象としております。」ということで、「人物」よりも「仕事」に対して与えられるといった性格が強いようである。これまでの受賞者は極めてヴァリエティーに富んでいるが、画家は案外少ない(漫画家は3人もいるが)。

路可はこれまでに〔上〕で紹介したように、外国では1925(大正14)年、ベルギーで〈Chevalier de L'Ordre de Leopold II〉を、1930(昭和5)年、イタリアで〈Cavaliere Corona de Itaria〉という二つの勲章を受章している。しかし、国内では没後に追贈された従五位勲四等〈旭日小綬章〉以外ではこの〈菊池寛賞〉が最大の榮譽と言えよう。

F. M壁画集団 イタリアでは独力で大壁画を制作した路可だが、60代を迎えて体力的にも限界を感じていたし、後継者の育成は急務だった。武蔵野美術学校では、正規の講座は服装史であったが、本科油絵科の教え子を率いて、《F. M壁画集団》を結成することになった。F. Mとはフレスコ・モザイクの略である。以後の壁画あるいは床モザイクの制作は彼らとの共同制作という形をとる。

壁画は通常垂直に立った動かせない大きな壁面に描くものだから、櫓を組んで昇ったり、それに面材を運び上げたり、移動したりと大変な体力を必要とする。

また、それを集団で制作する場合、構成メンバーの力量が揃っていなければならない。しかし、この段階では日本の美術教育機関ではこの分野の専門教育は全く行われていなかった。

武蔵野美術学校においては学校の協力も得て、新校舎の階段壁面、踊り場の大壁面が壁画制作の実践の場となり、特に3階～4階吹き抜けの大壁面は、4年生の卒業制作の壁面として共同制作が行われた。これを経験した学生たちが後に路可の弟子として実際に壁画制作作家として育って行くのである。

《F. M壁画集団》結成から半年後の1960(昭和35)年末、習作を展示する第1回《F. M展》が文藝春秋画廊で開催され、以後、毎年同じ場所で開催された。《菊池寛賞》を受賞した路可は、その縁もあって《F. M壁画集団》の展覧会を《文藝春秋画廊》で毎年開催する約束を取りつけたという。

メンバーには現在の日本美術界、ことに《春陽会》や《モザイク会議》の中心メンバーとして活躍する美術家が多い。

彼らの最初の共同制作は、早稲田大学33号館(第一研究棟)1階エレベータホ

ールの『杜^{もり}のモザイク』と題する路可原画の大理石の床モザイクである。

この建築は、同大学建築学科出身の村野藤吾(1891-1984)の設計により1962(昭和37)年3月に竣工したもので、外見は高く厚味のあまりない単純な四角柱に見えるため「国連ビル」などと呼ばれてきた。細部にはこの床モザイクの他、彫刻家=辻^{しんどう}蒼堂(1910-1981)のタイルレリーフやガラス工芸家=各^{かがみ}務^む鑑^{かん}三(1896-1985 鵜沼在住)のアートブリックなどがさりげなく配置され、変化を与えている。

それらの中で『杜のモザイク』は、ローマン=スタイルを用いた。白と黒2色の大理石のテッセラをローマ時代に確立された手法を用いて森林の木々に飛ぶ小鳥を配したもので、研磨はなし。この方法は設計者=村野藤吾の希望でもあった。研磨なしのため、40年余り過ぎた今、自然研磨によりその表情は暖かく、日本では他に例を見ないものである。

ところが昨年、この建物に耐震構造上の問題点があることが判り、大学はこれを取り壊して建て替えることを決定した。ここでもまた、「路可の作品の運命や如何に？」という問題が生じたのである。

大学内部から文学学術院^{たんおやすのり}丹尾安典(1950-)教授(美術史)らが美術作品の保存を積極的に働きかけた。原田恭子さん(以下敬称略)を中心とする制作メンバーは、何回か開かれた説明見学会に協力した。ついに大学側も保存の方向に転回し、昨秋、文学部校舎の美術的なものは新校舎に移設することが決定された。床モザイクを移設するという難工事はわが国では最初の試みである。恐らく4、5年後には新校舎に他のタイル壁面と共に移設された姿が見られるであろう。

今は亡き二つの作品 船橋ヘルスセンターは、1955(昭和30)年2月、船橋市の埋め立て地にオープンした。遊園地、プール、ボウリング場、ホテルのほか、大ローマ風呂、約30カ所もの宴会場などを備え、当時としては国内最大のレジャー施設といわれていた。劇場ステージでは、有名芸能人などによる歌謡ショー、漫才、落語などが上演され、特に往年の人気番組「8時だヨ！全員集合！」の公開放送が頻繁におこなわれた。

1962(昭和37)年に《船橋ヘルスセンターホテル日本館》がオープン、その玄関ロビー壁画に『人魚』[フレスコ]、『四季のモザイク』[モザイク]、床モザイクとして『河童百態』が長谷川路可と《F.M壁画集団》の若者たちの手で制作された。彼らの共同制作第2号である。

1977年5月、船橋ヘルスセンターは閉鎖。ホテルも、そこにあった共同制作作

品も取り壊された。

路可は船橋の仕事の後、アリタリア航空の就航記念招待で渡伊。日本二十六聖人列聖百年祭に参列し、イタリア各地をスケッチして9月に帰国した。

東松山カントリークラブは埼玉県東松山市大字大谷1111にあり、創業者が倒産したため会員が出資して自力再建、個人株主制のゴルフクラブになった。1962(昭和37)年に9ホールの増設が完成。翌年新クラブハウスが完成した。この際、玄関ホール側壁に黒・白・茶3色の大理石を用いた『彩雲』と題するモザイク壁画が、路可と《F.M壁画集団》によって制作されたが、その後の改装工事で失われた。

日生劇場床モザイク 《日本生命日比谷ビル》は、オフィスビルの中に劇場を取り込んだ形の建築で、早稲田大学33号館に続く村野藤吾の代表作とされ、昭和を代表する建築ともいわれる。1963(昭和38)年竣工当時には、向かいに大正を代表する建築の誉れ高い^{フランク ロイド ライト}Frank Lloyd Wright(1867年-1959)設計の《帝国ホテル》が対峙していたわけで、そのバランスにも村野は気を配ったといわれる。

このビルの1階、すなわち日生劇場のエントランスの床モザイクを長谷川路可と《F.M壁画集団》が手がけた。村野は早稲田大学の時と同じようにローマン=スタイルで研磨なしを希望していたが、ピロティーという人々の行き交う場所での安全性を慮った日生側の要望で最終的に機械研磨となった。

制作には長谷川路可の指導のもと、《F.M壁画集団》が中心となったが、メンバー以外の武蔵野美術学校の学生も多数参加し、《F.M壁画集団》は彼らの指導も行った。日生劇場/劇場案内のホームページには、長谷川路可の作品と紹介されているが、原画は矢橋六郎(1905-1988)(洋画家。矢橋大理石商店=現・矢橋大理石㈱)の専務を務めた。同商店は1901年創業。六郎は創業者の六男)による。

矢橋は他に壁モザイクも担当し、また、劇場内壁面ガラスモザイクは小柴外一が担当した。喜井豊治氏は『戦後日本のモザイク』の中で「村野(藤吾)氏の建築の中でも、日比谷の日生劇場は特に忘れがたい事例である。上述の矢橋(六郎)氏、小柴(外一)氏、長谷川(路可)氏などが一堂に会して大面積のモザイクの制作にあたった得がたい機会であった。」と記し、この3氏を戦後の代表旗手としている。

日生劇場にはファッツィーニの作品もあることから、長谷川路可が関与したことは間違いないが、この床モザイクは路可が共同制作を指導した作品である。

いずれにせよ、この床モザイクは、客席天井の2万枚に及ぶといわれるアコヤガイの装飾と並んで、日生劇場を訪れる人々に深い感銘を与え続けている。

国立霞ヶ丘競技場 東京オリンピックを期に高度経済成長期を迎えた日本では、建築物に装飾を施すゆとりが漸く芽生えてきた。

自らモザイク作家であり、モザイク研究家の喜井豊治(1953-)は、「1964年に東京オリンピックが開かれた。モザイクの制作量に関しては、どうもその頃がピークだったようである。」と述べる。

国立霞ヶ丘競技場(通称国立競技場)は、1958年、神宮外苑陸上競技場の跡地に建てられた。1964年、東京オリンピックの主会場として使われ、その改修を期に路可と《F.M壁画集団》は、オリンピックのメイン会場となる国立霞ヶ丘競技場の正面入り口に床モザイクとメインスタンドのエレベータータワー外壁にモザイク用ガラスを用いたモザイク装飾を施した。左側が「勝利」を意味する『野見宿禰^{のみのすくね}』像、右側が「栄光」を意味する『ギリシアの女神』像。日本のモザイクにエポックをもたらした記念すべき作品とされる。メイン玄関ホールには、『悠久(宇宙)』と題する国産大理石を用いた床モザイクが、路可の原画に基づき《F.M壁画集団》の手で制作された。開会式に訪れた昭和天皇は、「この床は若者たちが一枚一枚大理石を張って造られたものです」との説明を聞き、わざわざ端を歩かれたというエピソードが伝えられている。

この床モザイクはハイテク化に伴う地下ケーブル埋設工事の際、残念ながら取り壊された。メインスタンドの巨大な立像「勝利」と「栄光」は、最も多くの人々の目に触れる路可作品として健在である。



制作中の路可

今夏、北京オリンピックが盛大に開催され、無事閉幕した。

次の夏期大会はロンドン。その次の2016年夏期大会には東京都が名乗りを上げている。決定は2009年だが、東京に決まれば霞ヶ丘競技場の改修は必至であろう。

「路可の作品の運命や如何に？」

静岡県での合宿 『長谷川路可画文集』の年譜によれば、1964(昭和39)年の冒頭に「相模原中央研究所壁モザイク制作『幽玄』。」とある。この施設はどうか相模原市にあった富士製鉄(現新日鐵)の研究所らしいが、どのような作品だったのかは現在までのところ調べがつかない。なおこの研究所は閉鎖され跡地は売却され、いまは青山学院相模原キャンパスになっている、

これに続いて先述の霞ヶ丘競技場の仕事を行っている。オリンピックの開会式は10月10日だったから、恐らく夏までに競技場での仕事は完成したと思われる。

続いて多分秋になって《F.M壁画集団》を女性と男性に分けて、静岡県内の2か所の依頼主から発注された別々のフレスコ壁画の仕事を、それぞれ泊まりがけで行っている。これまでの共同作業は主にモザイクだったので、フレスコの実習段階に入ったのだろうか。

一つは《F.M壁画集団》の女性陣によって制作された『樹林図』で、浜松市鴨江の古刹=鴨江寺境内に新設された国際仏教徒会館^{じきどう}の食堂に描かれた。

フレスコ壁画『樹林図』は、正確な大きさは調べがつかないが、写真で見ると、高さを3^{メートル}とすれば、幅は12^{メートル}程度というかなり横長の画面である。

左側は秋の紅葉した落葉樹林(カエデ、トチとシラカンバ)を上寄りに描き、その右下にはこれも黄葉したカラマツがあしらわれている。

右側の画面には緑^{ろくしやう}青色のスギを中央下寄りに配し、右手には竹林を描いた。スギの下方には花をつけたサクラが描かれている。左右の樹林の間の空間は、青灰色のグラデーションで霧を表現しており、遠景の樹林が霧の中に霞む。

それぞれの樹種の担当をくじ引きで決め、伝統的な日本画の技法で描かせた。これが共同制作の共通項となり、図全体の統一性をもたらす狙いである。

サクラの枝には1羽の小鳥がとまっている。左側のトチの大木にはキツツキが描かれており、空には3羽の小鳥が飛ぶ姿が描かれている。サクラとこれらの小鳥は路可自身が担当したという。

《F.M壁画集団》の女性陣は、主に武蔵野美術学校の西洋画科の学生が中心だったが、ここでフレスコとともに日本画の技法も習得できた。

一方のフレスコ壁画『香^{かおり}の華』は、1964(昭和39)年、静岡市のシャンソンビルに路可の下絵により《F.M壁画集団》の5人の男性陣によって制作された。

高さ3^{メートル}、幅6^{メートル}の壁面に薄緑の春の花野が描かれ、左手にジャスミンの花束を持った「香水の精」とされる裸体の女神が岩に腰掛けており、中央から右側には4人の長い裾の着衣の村娘が長い花輪を拵げて、女神に捧げようとしている。

いかにも化粧品会社の本社ビルにふさわしい夢幻的で美しい仕上がりだが、さほど大きな評判にはならなかったらしい。

というのは、1981(昭和56)年4月25日付けの『静岡新聞』に「忘れられた画法日の目」「長谷川路可の「香の華」フレスコの大壁画見つかる」などの見出しで大々的に報じられているからである。

きっかけは写真家=岡村^{たかし} 崔(1927-)にシャンソン化粧品の副社長が話したことから、岡村が現物を見て激賞したということのようである。岡村 崔といえば、ヴァチカン、システリーナ礼拝堂のミケランジェロの壁画『天地創造』をはじめ、数多くのフレスコ画を撮影し続けている世界的な写真家として知られる(彼は静岡の出身で、登山家としても有名である)。その岡村が「長谷川さんの大作がこんなところに残っていたとは驚きです。『香の華』は長谷川さん独特のイタリアの伝統的な絵画技法と日本画技法をみごとに調和させたすばらしい作品。日本では、めったに鑑賞できない貴重な作品では——」と褒めちぎっている。

ところが、この作品は制作過程で完成を急ぐ余り固化する前に空調を入れるという手法に失敗があったらしく、剥落が進み、取り壊されたという。

日本二十六聖人記念館 1965(昭和40)年、《日本美術家連盟》理事に就任した路可だが、しかし、この翌年頃から体力の衰えからか寡作になっていった。

1966年に《日本二十六聖人記念館》(長崎市)からの依頼で『ザヴィエル像』[フレスコ]を中山竹史を助手として制作したところで、心臓病で東京女子医大病院へ入院することになった。

退院後の翌年、路可自身「爆弾」と呼んでいたニトログリセリンを常備し、弟子=宮内淳吉、古川清右を助手として《日本二十六聖人記念館》『長崎への道』[フレスコ]を制作、これが遺作となった。『長崎への道』は、2.7m×6.6mの壁一面に描かれたフレスコ壁画で、日本二十六聖人の大阪での捕縛から長崎で処刑されるまでの、14のシーンを描いている。国画の伝統的手法の一つである絵巻物の形式をとった物語風の壁画。まさにカトリック美術家、日本画家にして日本フレスコのパイオニアとして歩んできた長谷川路可の遺作にふさわしい作品といえよう。

《日本二十六聖人記念館》はJR長崎駅前に聳える立山の中腹にあり、そこへは西坂と呼ばれるかなり急な坂道を登らなくてはならない。恩師の享年と同じ歳を迎えた弟子の原田恭子は、この坂を登って、心臓病を抱えてこの坂を毎日上下したことが路可の身体に与えたダメージを実感したという。

ローマでの客死 だが、国際的カトリック画家=長谷川路可としてはもう一つの作品が準備されていた。イスラエルはナザレの《受胎告知教会》に、日本を代表する聖母子像の制作が要請されていたのである。

1967(昭和42)年6月、教皇の招聘によりヨシノ夫人と共に渡伊。チヴィタヴェッキアの壁画制作継続、イスラエル《受胎告知教会》のモザイク制作の交渉をするとともに、教皇=Paulus VIに拝謁。『暁のマリア』を献呈することができた。

この間、欧州旅行中だった原田恭子や旧友の彫刻家=Pericle FAZZINI^{ベリクレ ファッツィーニ}とも再会、ファッツィーニの許で修業中の日本人彫刻家=小野田はるの、川原竜三郎とも交流した。彼らは後の葬儀の際までヨシノ夫人の支えとなった。

教皇拝謁の4日後、6月30日に路可は脳溢血を発病。《メルチェデ病院》(ローマ)に担ぎ込まれた。夫を頼り切って初めての海外旅行に赴いたヨシノ夫人にとって、この事態の展開における狼狽と心労は察するに余りある。

原田は一足先にモンテカルロ(モナコ)にある路可のフランス留学時代の友人=Carlo ZANON^{カルロ ザノン}(彼は来日した際に鶴沼の路可のアトリエを訪れたり、チヴィタヴェッキアの制作現場を訪れて、芳名録となった下絵に名を残している)の別荘を訪れるために夜行列車で向かった。路可夫妻は翌朝の飛行機でニースを経由しモンテカルロの駅で原田と合流する手はずになっていた。原田は予定の列車で路可夫妻が下車しないので、あるいは先に行っているのかとザノン宅を訪ねると、玄関先に蒼白な顔で現れたザノンは、電報を手渡した。「路可先生は亡くなったの？」と大声で叫ぶと、老人は大きく手を振った。原田は驚いてローマへ電話を入れたが、隣国とはいえ、国際電話である。当時の事情では繋がりが悪かった。イタリアの国境の町、ヴェンティミリアまで行き、ホテルに電話を入れて入院した事情を知り、早速夜行列車でローマに向かった。7月1日の早朝、病院に駆けつけると、ようやく危篤状態から脱し、冗談が言える程度の病状になっていたので、ひとまず安堵することができた。

2日間の小康状態の後、愛妻ヨシノ夫人と原田恭子に看取られながら、マリアノ・石井神父による秘蹟を受け、7月3日午前5時、長谷川路可は《メルチェデ病院》から天に凱旋した。満70歳になる僅か6日前のことであった。

亡骸は懐かしのチヴィタヴェッキアに運ばれ、《日本聖殉教者教会》の自らの作品に見守られる位置に安置された。チヴィタヴェッキア市名誉市民=長谷川路可の市葬には、與謝野^{しげ} 秀イタリア大使(與謝野寛・晶子夫妻の二男)をはじめ、教会堂から溢れるほどの市民が肅々と参列して別れを惜しんだという。

その模様はNHKイタリア支局によって収録され、日本へ送られた。

原田はたまたま日本航空ローマ支店に勤務していた従姉の夫を訪ね、亡骸のまゝ帰国させたい旨を依頼し、実現した。

かくして夫人と同じ便で亡骸は無事羽田に帰国した。日本での葬儀は7月11日、《聖イグナチオ教会》(東京・麹町)で執り行われた。

また、従五位勲四等に叙され、〈旭日小綬章〉が追授された。

華の聖母子 イエス=キリストは「ナザレ^{びと}人」とも呼ばれる。彼はこの世の生活の大部分を、イスラエル北部、ガリラヤ地方のナザレで過ごした。彼の父親(厳密にいえば母=マリアの夫)=ヨセフがこの町で建築業を営んでいたからだ。マリアがヨセフと婚約した段階で、天使=ガブリエルが彼女の前に現れ、胎内に神の子を宿していることを告げ知らせる。

326年、コンスタンチヌス大帝の母ヘレナの頼みにより、ナザレの町、マリアの家の跡とされる場所に築かれた教会が中近東最大のキリスト教会とされるインターナショナルの《受胎告知教会》である。現在の聖堂は、カトリック=フランシスコ会によって14年かけて建造され、1969年に完成した。

マリアのシンボルとされるユリの花をかたどったキューポラが聳え、正面の壁には聖母子、天使=ガブリエル、四福音書作者のレリーフが見られる。

聖堂内外の壁面には各国の画家が描いたそれぞれの風俗を表す聖母子像の壁画が並んでいる。中でも異彩を放っているのが、長谷川路可作とされる『華の聖母子』である。高さ5.5¹/₂、幅2.6¹/₂の大画面に牡丹の花園に佇む細川ガラシアを想定した和装の聖母子が描かれたモザイク壁画だ。素材はズマルト(モザイク用ガラス)で一部に真珠を用いて日本を表現させている。

たまたま師の臨終に立ち会うことになった原田恭子为中心となり、路可の遺志を継いで《F.M壁画集団》の山内祥、古川清右も加わって制作が進められた。制作はヴェネツィアのオルソーニ工房を借りて行われた。下絵に沿って基底材を細かいパネルに分割して制作、イスラエルに運ばれ、パネルの接続部分は現地の職人に任された。制作した《F.M壁画集団》の面々は完成に立ち会っていない。折から“第四次中東戦争”が始まったからである。

筆者は1985(昭和60)年の夏、ナザレの《受胎告知教会》を訪れて『華の聖母子』の実物に接する機会を得た。「長谷川路可」というプレートしかないことから、これが没後に弟子の手で完成されたことなど知らずに、そのまま帰国し、後に会

誌『鵠沼』86号に執筆した『旅先で出会った三人の鵠沼人の仕事』の中で勘違いのままを記してしまった。恩師への最後の奉公という弟子の希望から、路可の遺作として発表されたからである。ここを訪れる多くの人々も、路可が描いたのは下絵のみで、路可が育てた弟子たちが遺志を継いで造り上げ、イスラエルの職人によって完成したものであることを知らずに、この大作を見上げている。

おわりに　筆者は長谷川路可という人に会ったことはない。また、その作品も実物に接したのは『華の聖母子』の他に、ご遺族が藤沢市に寄贈された作品や没後の展覧会に出品された小品、地元の教会や寺院の作品くらいのものである。

そんな筆者が不遜にも路可の生涯を綴る気になったのは、「はじめに」に記したように、2004年の100日間《鵠沼郷土資料展示室》で開かれた『一写真と資料による紹介—鵠沼が生んだ世界的画家 長谷川路可展』の仕事に携わり、すっかり長谷川路可という人物に惚れ込んだことと、路可という人物が忘れ去られようとしているような危機感を抱いたからである。

書き出しては見たものの、これはとんでもないものに取り組んでしまったと気付いたが、後の祭り。はじめは〔上〕〔下〕で収めるつもりが〔中〕を挟んで3回分になってしまった。

その間、風巻義孝、百世ご夫妻をはじめとするご遺族の皆様方、原田恭子、宮内淳吉両氏をはじめとする路可のお弟子さん方には様々な形で原稿の段階から文字通りのご指導、ご鞭撻を賜った。記して深く謝意を表する次第である。

『長谷川路可伝』などという題名をつけたため、本格的な伝記を期待された向きもおありのようだ。筆者にはもとよりそのような大それたことをするつもりはなかった。第一そんな力量を持ち合わせていない。題名は、幕末に邦訳が出版されて以来、古い文語訳の新約聖書には『ルカによる福音書』が『路加傳』と題されていたので、それをもじったまでである。

フレスコといい、モザイクといい、長期の保存を期待して数千年前に開発された技術である。ところが、現代の日本では、紙や絹よりも寿命が短い。岩国市庁舎や早稲田大学は、まだ幸運な例だ。それも、路可に近い方たちの呼びかけがあって初めて事態が動いた。チヴィタヴェッキアも気がかりである。さらにアンテナを張り巡らし、「路可の作品の運命や如何に？」という事態に備えなければならないだろう。

【完】

(わたなべ りょう)

長谷川路可 晩年の壁画



『華の聖母子』[モザイク]

《受胎告知教会》(イスラエル・ナザレ)

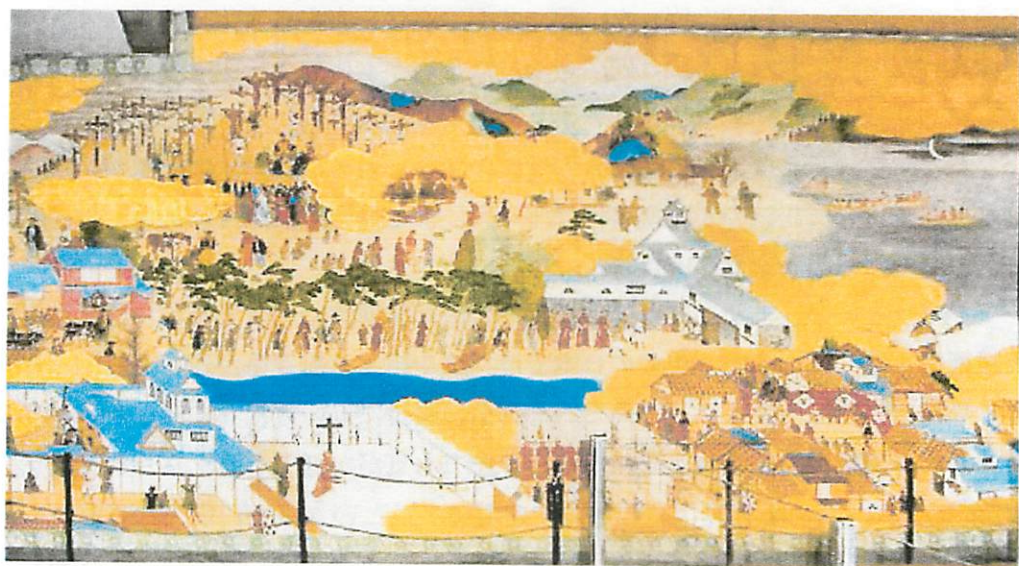


『人魚』[フレスコ]制作中のF.M壁画集団と路可
《船橋ヘルスセンターホテル日本館》(船橋市)



『香の華』[フレスコ]

《シャンソンビル》(静岡市)



『長崎への道』[フレスコ]＝遺作 《日本二十六聖人記念館》(長崎市)

長谷川路可略年譜

- 1897 7月9日 東京に生れる 本名・龍三。 父=杉村清吉 母=たか
- 1904 暁星小学校(東京・麹町)に入学。寄宿舎へ
- 1907 両親の協議離婚により母方に入籍。長谷川姓になる
たか、妹=ゑい(東屋初代女将)のいる鵠沼へ転居。龍三の籍も鵠沼となる
- 1910 暁星中学校に進学
- 1914 函館郊外・当別のトラピスト修道院に滞在。三木露風と親交
再興第1回《日本美術院展覧會(院展)》に出品。『浜辺にて』[水彩]
暁星学校にてHenri HUMBERCLAUDE神父より受洗。洗礼名：ルカ
- 1915 暁星中学校を卒業。渡邊華石に師事し南画を習得
- 1916 東屋の初代女将=長谷川ゑい、死去。姉=たか、女将を受け継ぐ
東京美術学校日本画科に入学。松岡映丘に師事
雑司が谷、巢鴨などに、在学途中からは従弟の長谷川欽一と住む
- 1921 東京美術学校日本画科を卒業。卒業制作『流さるる教徒』[日本画]
日本郵船「加茂丸」にてフランスへ留学。船中で徳川義親侯爵と知り合う
Charles GUERIN に師事、洋画技法を修得
戸塚文郷の勧めにより《Bon Samaritan》に加わってロンドンに行く
- 1923 《Salon d'Automne》入選。リール美術館買い上げ
- 1924 松本亦太郎教授から西域壁画の模写を依頼される
ドイツのフェルケルクンデ博物館、英国の大英博物館の西域壁画を模写
- 1925 5月まで フランスのルーヴル美術館とギメ博物館における模写
《アール・デコ》(パリ)の日本美術館建設に参加
ブラッセル文化美術博覧会の日本美術館建設と陳列に参加、勲章を受ける
大英博物館の模写を終え、ベルリンに向かう
ベルリンの日本美術展開催に小室翠雲代表と参与
- 1926 2月 パリに戻り、ルーヴルにおいて東京美術学校のための模写を行う
Paul Albert BOWDOINにフレスコ画技法を学ぶ
《国際航空委員会議》でフォッシュ元帥に席画を披露
《Salon d'Automne》会員推挙
《Ecole du Louvre》の西洋服装史専科修了
- 1927 外遊より帰国し、現・藤沢市鵠沼海岸 2-9-12 にアトリエを構える

- 1927 東屋において「長谷川路可画伯歓迎会」
新興大和絵会に加わり、第7回・同展覧会にフレスコ画などを出品
- 1928 1月15日 菊池登茂と結婚
カトリック喜多見教会(東京)に日本で最初のフレスコ壁画を制作
11月3日 長女=百世、誕生
- 1929 国民新聞に連載の大佛次郎『からす組』の挿絵を担当
藤沢町旧郡役所にて個展。
大和学園高等女学校(現・聖セシリア女子高校)で美術を担当する
- 1930 《羅馬開催日本美術展覧會》に大観、映丘、百穂などと参加、勲章を受賞
教皇=Pius XIに拝謁、『切支丹曼陀羅』[日本画]を献呈
銀座資生堂ギャラリーにて《世界一周スケッチ展》
浜松の洋画家=佐々木松次郎らと《カトリック美術協会》を結成
- 1931 《新興大和絵会》解散
早稲田大学で講演。理工学部建築科の研究室の壁にフレスコ画を描く
- 1932 第1回《カトリック美術協会展》出品。
ジャワ、バリ島など南方の島々を廻る
8月1日 次女=百合子、誕生
- 1933 徳川義親邸(東京)にフレスコ画を制作
- 1935 徳川生物研究所(東京)の建築装飾に従事
台湾を廻る。台北教育会館にて個展
4月16日 三女=清子、誕生
松岡映丘を中心とする《国画院》結成に参加。
- 1937 鶴沼より東京目白へ転居
文化服装学院に出講し、服飾美学・服装史を担当
- 1938 1月 妻=登茂、結核のため東京市療養所入院
3月2日 師=松岡映丘、死去
尾張徳川家納骨堂(瀬戸市定光寺)にフレスコ壁画制作
9月7日 母(東屋2代目女将)=長谷川たか、死去。墓所：本眞寺
狩野光雅、遠藤教三と《三人展》結成
文化服装学院の大講堂に大黒板左右1対の壁画制作
- 1939 共立女子専門学校に出講
日本大学専門部芸術科(現・芸術学部)へ出講。日本画、フレスコを担当

- 1939 カトリック片瀬教会献堂。内部装飾および『十字架の道行き』等を制作
藤山工業図書館にフレスコ壁画を制作
- 1940 東京家政専門学校(現・東京家政学院大学)に出講。服飾史を担当
11月22日 妻=登茂、東京市療養所にて死去
- 1941 《三人展》を《翔鳥会》と改称。出品。
芸術科がある日本大学江古田校舎講堂にフレスコ壁画を制作
朝鮮風景個展
- 1942 9月11日 金子ヨシノと結婚
- 1944 8月24日 長男=巖、誕生
- 1945 山形の妻の実家に疎開
- 1946 文化服装学院へ出講(再任) 11月 恵泉女学園高等部に出講。服飾史を担当
- 1948 2月13日 次男=路夫、誕生
- 1949 鹿児島カテドラル・ザビエル教会にザビエル渡来400年記念壁画を制作
- 1950 文化女子短期大学教授 就任
母=長谷川たか墓所の本眞寺に『歩む釈迦像』[水墨板絵]を描く
聖年に際しサイゴン経由のフランス船でイタリアに渡る
- 1951 教皇=Pius XIIに拝謁、『切支丹絵巻』を献呈
金山政英代理公使に面会、《日本聖殉教者教会》の内装を依頼され、受諾
1月 《日本聖殉教者教会》壁画構想に取りかかる 5月 下絵完成
7月 チヴィタヴェッキアのフランシスコ会修道院に入る 8月 壁画制作着手
- 1953 徳川夢声連載対談「問答有用」第132回(海外版第9回『週刊朝日』
日伊合作映画『マダム=バタフライ』のタイトルバックを描く
- 1954 2月 祭壇を囲む正面殉教図5画面と天井画完了し、信徒席周辺6箇所の小
祭壇の壁画制作にとりかかる
10月 壁画完成の祝別式、チヴィタヴェッキア市名誉市民に列せられる
- 1955 後援者=石橋正二郎の依頼により、ヴァチカン美術館所蔵の壁画を模写
- 1956 ウルバノ大学(ローマ)にフレスコ壁画制作
- 1957 《日本聖殉教者教会》壁画制作が一段落し、帰国
文化女子短期大学へ復職
壁画資料・滞伊中のスケッチ等を積んだ英国船シロン号がスエズで沈没
- 1958 武蔵野美術学校本科デザイン科講師として出講し、服装史を担当
昭和女子大学短期大学部、日本女子大学へ出講し、服装史を担当

- 1958 岩国市庁舎壁画モザイク制作
 初来日したPierre CARDIN^{ピエール カルダン}の文化学園での実演講義の通訳をする。1961も
 ブリヂストン美術館で個展
- 1959 古屋旅館(熱海市)大浴場にフレスコ壁画制作
- 1960 第20回《国民歌劇協会》公演オペラ『細川ガラシア』の美術を担当
 第8回〈菊池寛賞〉受賞
 武蔵野美術学校の教え子を率いて、《F.M壁画集団》を結成
- 1961 早稲田大学文学部棟1階エレベータホールに床モザイクを制作(F.Mと)
- 1962 船橋ヘルスセンターホテル(船橋市)にフレスコ・モザイク制作(F.Mと)
 第1回《国画人協会展》出品
 アリタリア航空の就航記念招待で渡伊。日本二十六聖人列聖百年祭に参列
- 1963 東松山カントリークラブ壁モザイクを制作
 日生劇場(東京・日比谷)ピロティ床モザイクを共同制作(F.Mと)
- 1964 文化女子大学教授に就任
 相模原中央研究所壁モザイク『幽玄』を制作(F.Mと)
 国立霞ヶ丘競技場玄関床モザイク、メインスタンド壁モザイク制作(F.Mと)
 国際仏教徒会館(浜松市)に《F.M壁画集団》女子とフレスコ壁画制作
 シャンソンビル(静岡市)に《F.M壁画集団》男子とフレスコ壁画制作
- 1965 《日本美術家連盟》理事となる
 オペラ『細川ガラシア』の衣装考証および舞台美術監修
- 1966 日本二十六聖人記念館(長崎市)に『ザヴィエル像』[フレスコ]制作
 心臓病で東京女子医大病院へ入院
- 1967 日本二十六聖人記念館に『長崎への道』[フレスコ]制作(宮内淳吉、古川清右と)
 教皇=Paulus VIに招聘され渡伊
 6月30日 ローマで脳溢血発病
 7月3日 午前5時、脳溢血のため、メルチェデ病院(ローマ)にて死去
 7月7日 日本聖殉教者教会においてチヴィタヴェッキア市葬
 7月11日 聖イグナチオ教会(東京・麹町)において葬儀
 従五位勲四等に叙され、〈旭日小綬章〉受章
- 1968 受胎告知教会に路可の下絵で《F.M壁画集団》による『華の聖母子像』完成
- 1975 Pericle FAZZINI^{ペリクレ ファッツィーニ}から贈られた『長谷川路可のためのキリスト像』を受領
- 1996 早大建築科研究室のフレスコ再発見、修復後會津八一記念博物館へ

主要参考資料及び引用資料

【参考文献】

- 長谷川路可：『長谷川路可画文集』（株）求龍堂（1989）
- 高三啓輔：『鵠沼・東屋旅館物語』博文館新社（1997）
- 喜井豊治：『戦後日本のモザイク』
モザイク会議広報誌「Mosaic」vol.4（1999）
- 有田 巧：『長谷川路可・フレスコ画「アフロディーテ」の移設』
會津八一記念博物館研究紀要 第1号（2000）
- 基信祐爾：『東京国立博物館保管中央亞細亞画模写と長谷川路可』
東京国立博物館『MUSEUM』第572号（2001）
- 有田 巧：『長谷川路可のフレスコ画〈1〉〈2〉〈3〉』
會津八一記念博物館研究紀要 第4～6号（2003～2005）
- 大野 彩：『フレスコ画への招待』（岩波アクティブ新書）（2003）
- 竹中正夫：『美と真実 近代日本の美術とキリスト教』（新教出版社）（2006）
- 片岡瑠美子：『描かれた日本の殉教者たちー長谷川路可作品を中心にー』
純心女子大講座記録（2007）
- チヴィタヴェッキア《日本聖殉教者教会》日本語案内リーフレット

【ホームページ】

- 『日本26聖人』フレスコ画 イタリア チィヴィタヴェッキア市教会1967年
<http://blog.nanto-e.com/column/13/>
- 流さるる教徒（東京藝術大學美術館）
<http://db.am.geidai.ac.jp/object.cgi?id=2581>
- 切支丹曼荼羅（ヴァチカン美術館）
http://mv.vatican.va/4_ES/pages/x-Schede/METs/METs_Sala05_01_01_031.html
- 長谷川路可画伯のフレスコ画（カトリック喜多見教会）
http://www5f.biglobe.ne.jp/~kitami_church/resources/fresco.html
- アフロディーテ（ヴィーナス）（早稲田大学會津八一記念博物館）
<http://www.waseda.jp/aizu/colle/col3e.html>

鵠 沼 の 文 化 財

中島 明（会員）

1. 文化財とは

私たち人間が、遠い昔の古代から現代に至る長い歴史の中で、深いつながりを持ってきたもの全てが文化財であり、それは私たちの祖先が日常の生活を営む中で創造したのはもちろんのこと、動物・植物・地質鉱物など天然のものも含まれ、多種多量で膨大な量になります。

これらの文化財は、遠い昔の生活に触れ、歴史への理解を深めるのに役立ち、過去と現在、さらに未来に生きる人間の心をつなぐところに価値があり、私たちの共同の財産です。

そして、私たち現代に生きる人間には、これら文化財の価値を深く理解し保護・活用して、後世の人々に伝えて行くという大切な役目が与えられているのです。

現行の文化財保護法ではこれらの文化財を、次のように分類し定義しています。

(1) 有形文化財（重要文化財）

絵画、彫刻、工芸品、書籍、典籍、古文書、その他の有形の文化的所産でわが国にとって歴史上又は芸術上価値の高いもの、及び考古資料。

(2) 無形文化財（重要無形文化財）

演劇、音楽、工芸技術、その他の文化的所産で、わが国にとって歴史上又は芸術上価値の高いもの。

(3) 民俗文化財（重要有形民俗文化財、重要無形民俗文化財）

衣食住、生業、信仰、年中行事等に関する風俗習慣及びこれらの物件で、わが国民の生活の推移を理解するために欠くことのできないもの。

(4) 記念物

貝塚、古墳、都城址、城址、旧宅その他の遺跡でわが国にとって歴史上又は学術上価値の高いもの。庭園、橋りょう、峡谷、海浜、山岳その他の名勝地でわが国にとって芸術上又は観賞上価値の高いもの、並びに動物、植物、及び地質鉱物で生息地繁殖を含み、わが国にとって学術上価値の高いもの。

(5) 伝統的建造物群

周囲の環境と一体をなして歴史的な風致を形成している、伝統的な建築物群で価値の高いもの。

このほか、文化財保護法には、地下や水底などに埋蔵されている文化財を埋蔵文

化財という別の文化財として規定されています。

2. 藤沢市文化財保護推進員

私は、平成 15 年 4 月に藤沢市文化財保護推進員の鵜沼担当を委嘱されました。

そもそも文化財保護推進員とは、昭和 58 年に文化財パトロール員として発足。平成 5 年に文化財保護推進員と名称を変え、市内各地区の国・県・市指定文化財・登録文化財を、定期的に巡回して破損などの状況を調査して実態を把握し、又巡回によって見まわる目があることを示し、文化財の破損などを防ぐ目的があります。

鵜沼地区の巡回範囲・場所は次の通りです。

(1) 指定文化財及びその説明板、標柱

①江の島弁才天道標 (市指定重要文化財・建造物) 法照寺 鵜沼神明 2-2-24 および 説明板。

②大橋重政の墓 (市指定重要記念物・史跡) 空乗寺 鵜沼神明 3-3-21 および 説明板 標柱。

③旅館東屋の碑 (市の指定なし) 永井邸角 鵜沼海岸 2-8-26 および同所と、市民センター前の説明板 有田商店脇の標柱。

④皇大神宮人形山車 (市指定重要無形民俗文化財) の説明板 皇大神宮 鵜沼神明 2-11-5



(2) ハイキングコース案内板 永井邸角にある東屋記念碑と説明板

①鵜沼南部コース 引地川緑地左岸公園 (八部運動公園横)

②鵜沼北部コース 烏森公園 鵜沼神明 2-907

(3) ふるさとマップ案内板、説明板

①案内板 鵜沼市民センター前、八部運動公園内、桜小路公園内

②説明板 「鵜沼の由来」鵜沼市民センター前、「鵜沼海岸の由来」鵜沼郵便局前、「本鵜沼の由来」農協鵜沼支所横、「鵜沼神明の由来」皇大神宮参道、「藤が谷の由来」藤が谷市民の家前、「石上の由来」砥上公園横。

上記の文化財等の状況把握のため、巡回調査を2か月に1回実施し、調査時において文化財及び説明板、ふるさとマップ案内板、説明板等の汚損、損傷又は紛失を発見した時は、藤沢市教育委員会にその現状写真を添えて所定の用紙で報告することになっています。

3. 鵠沼の文化財

現在、藤沢市には国・県・市あわせて91件の指定文化財があり、そのうち鵠沼地区には、国指定1件、県指定1件、市指定3件の計5件の指定文化財があります。以下その文化財を紹介いたします。

(1) 国指定・重要無形文化財工芸技術（友禅）保持者（人間国宝）

田島 博（田島比呂子）氏 鵠沼海岸2丁目在住。

平成11年(1999)6月21日指定

田島氏は、大正11年(1922)東京に生まれ、昭和11年(1936)尋常高等小学校卒業と同時に高村樵耕、高村柳治に師事し、下絵を中心とした友禅染の技術を習得

されました。昭和29年(1954)友禅作家として独立し、以来日本伝統工芸展を中心に作品を発表しつづけておられます。

研究会では、中村勝馬（重要無形文化財「友禅」保持者）の指導を受けるなど、高度な友禅のわざを磨くと同時に、糊置きや染色に研究を重ね、堰出しや叩き糊の手法に工夫を加えて、古典的な手描き友禅を芸術性豊かな現代の作品として完成させています。

田島作品の特色である「詩情」は彼が「詩人」の感性をもっていることからきています。

日本列島北から南に、さらには海外にも足を延ばす取材旅行による、自然風景のスケッチ、カメラ



田島比呂子氏

で撮り貯めた写真資料から得た意匠の集積、着物の模様としての構想、小下絵の製作から原寸大の大下絵。あらかじめ染め色の仕上がり確かめる試し染め。そして、青花の下絵付け、糸目糊置き、色挿し、伏せ糊、地染め、染料の色を留める蒸気蒸し、最後の仕上げとなる水洗いと、全ての工程を弟子もおかず一人でこなしています。

自然をいとおしみ、自然を手本とする謙虚な気持ちが伝わる、清新で詩情あふれる独自の作風は、日本伝統工芸展等で高い評価を得ています。

社団法人日本工芸会では理事等を永く務めて後進の指導にも尽力され、さらに画期的な保存事業とされる、社団法人日本工芸会の「茶屋染帷子の復元」においても中心的な役割を果たされています。

なお、平成 11 年 10 月には藤沢名誉市民の称号を与えられました。

(2) 県指定重要文化財工芸品「わきざし」銘相州秋広 1 口

鶴沼在住 M 氏所蔵（非公開） 昭和 33 年(1958)6 月 17 日指定

銘：(表) 相州住秋広 (裏) 貞治三年十二月口日

法量：刃長 37.6cm 茎 9.5cm 元巾 3.1cm。

目釘穴 1 個。

貞宗門下と伝える鎌倉鍛冶・秋広の貞治 3 年(1364)の作です。身幅の広い平造りの形などはこの時代の特色を表わしています。

地鉄は板目鍛え（木の板に似た地肌）、刃文は互の目乱れ（波形の乱れ刃）、皆焼刃になっています。刀銘には年号を略記するものが多くみられますが、この刀は明確に切ってある稀な例です。黒田家に伝来した名刀です。

(3) 市指定重要文化財建造物 江の島弁財天道標

法照寺境内 鶴沼神明 2-2-24 管理者 藤沢市教育委員会

昭和 41 年(1966)1 月 17 日指定

a. 江の島弁才天道標

杉山検校が「多くの参詣者が道に迷うことのないように」と、藤沢宿より江の島へ続く約 4km の江の島道周辺に、48 基の道標を建立したと伝えられていますが、100m 弱に 1 基は考えられず、又、他の道筋（江の島脇往来等）に建立されていますので、数については疑問視されています。

市の指定重要文化財として、市内に現存しているのはこの法照寺の他、市役所構内(2 基)、白旗神社境内、遊行通り、片瀬小学校門脇、密蔵寺向かい辻、片瀬市民センター構内、西行戻り松脇、なぎさ事務所前、元片瀬郵便局前、江の島神社参道脇の 12 基で、この他、市内には指定外で鶴沼海岸 7 丁目 S 氏邸庭園内、遊行寺塔中真徳寺内の 2 基が確認され、市外では鎌倉市腰越公民館内に 1 基あり現存は計 15 基です。

いずれも火成岩製でほぼ同型同大で、高さ 120cm の尖頭角柱形で、四面のうち三面に「一切衆生」「ゑのしま道」「二世安楽」と刻まれています。

ところで、この法照寺の「道標」は以前何処にあったかで諸説があります。

大山道より江の島へ抜ける脇道のいわゆる

「江の島脇往来」は、旧東海道を「湘南高校入口」で右折して「車田稲荷」の前を通過、

「一本松」に行く道と言われ、法照寺の近く

に住んでおられた故関根会員によれば、この往来で日本精工の裏あたりの道端に転がって

いて、近隣の人たちが腰掛石にしていたとか、

有田会員によれば、この道を一本松の方に曲がらずに更に進んだ、現在の「三富士町」バ

ス停付近の道路工事の際に出てきたとか、又、故伊藤節堂会員は「わが住む里 32 号、江の島

道しるべ考」の中で、引地川の袂を川沿いに

進み万福寺の西を通過して普門寺の北に出る道が「第二の江の島道」とし、その道筋の東海道線線路予定地にあったとしています。何れが正しいかは確実な史料がありません。

江の島道については、故川上会員が会誌鵠沼 73 号に書かれた「鵠沼の古道（江の島道を歩く）」にある、車田稲荷を通過する「江の島脇往来」が、明治 8 年 6 月 5 日太政官の皇国地誌編輯細則に基づく「皇国地誌村誌相模国高座郡鵠沼村」に記載されているとのことで信憑性があります。

なお、法照寺にある道標は「一切衆生」が「二切衆生」と「一」の上にさらに小さな「一」が刻まれています。近隣の者がいたずらで刻んだものと思われ誠に残念なことです。

b. 法照寺

善光山天龍院法照寺と称し、浄土宗総本山知恩院の末寺で本尊は阿弥陀如来。開山は真為で享保 2 年(1717)に入寂しています。寛文元年(1661)に龍保和尚の創立したものとも云われています。宝永元年(1704)欣譽により中興され法照寺となりました。

境内には相模国準四国八十八ヶ所のうち 48 番の弘法大師石像が 2 体あります。



法照寺にある道標

(4) 市指定重要文化財 史跡 大橋重政の墓

藤沢市鶴沼神明 3-3-21 管理者 空乗寺 昭和 40 年 5 月 31 日指定

- a. 重政の墓 空乗寺本堂裏の境内墓地の西北隅にあります。墓域はやや東方に向いて、南北 268 cm、東西 182 cm の四角形で、全面コンクリートガ敷きつめられています。

墓碑は小松石製の笠塔婆形で、台石とも総高 112 cm、碑身は核中型です。

〔銘〕

(前面) 龍性院殿釋道居士
上春院殿釋妙慶禪尼

(側面)

右面 俗名 大橋長左衛門尉源重政 寛文十二壬子年閏六月晦日

左面 承應二癸巳年二月二十九日 一色式部少輔源範勝娘

背面 龍性院殿第三十三回遠忌為追福修繕造於石塔回向干菩提
皆宝永元甲申稔六月晦日

施主 孝子

大橋新五左衛門源重好

同 小兵衛尉源重尚

墓碑の銘文によると、この墓碑は、重政が没後三十三回忌にあたる六月晦日に後嗣重好ら兄弟らによって造立されたものであることがわかります。今は大橋家の墓参は絶えています、その墓域は整然と保存されています。



これは、大橋家がかつて当寺

空乗寺の大橋重政の墓

の大壇越であったこと、特に重政は、当寺が御朱印地拝領などのためにつくされた功績を深く追慕して、当寺歴代の住持の心遣りによるものです。

b. 大橋重政(1618~1672)

大橋氏は文徳源氏の出で河内の国に住んでいました。数代前の重治が三好長慶に属し、その旗下にてしばしば軍功を立てましたが、永禄 9 年戦死しました。

その子重慶も三好氏に仕え三好氏没落後豊臣秀次に仕えましたが、天正 12 年徳川家との長久手の戦いで戦死しました。その子重保は伯母の元で育てられ、成人

して大阪にて片桐克元に属しました。

徳川家康の大阪城攻め(1615)の際に片桐家に従い従軍し戦傷を負いましたが、その後、徳川家に仕えることになりました。重保は書を良くするので二代將軍秀忠の際に召されて御祐筆となり、相模国高座郡に采地 500 石を賜りました。重保は三代將軍家光にも重用され御伽衆に召され、御佑筆辞退後も高田牛込に土地を賜り邸を建てました。正保 2 年(1645)64 歳で没し、宅地内に墓碑を建立した南蔵院に葬られました。

重政は重保の長男として江戸に生まれました。寛永 8 年(1631)祐筆に挙げられ(14 歳)、同 10 年(1633)家督を相続し鶴沼で 500 石を賜り、その後祐筆吟味役、評定所出仕等を歴任し、幕府公用文及び將軍の手本を執筆いたしました。

書家として父より受け継いだ書法に独自の書法を加味し、大橋流書法を完成させました。空乗寺慶心に帰依し采地のうち 9 石余を寄進し、その後幕府により御朱印地として認可されました。寛文 12 年(1672)6 月没し当寺に葬られました。

c. 空乗寺

当寺は金堀山空乗寺と号し、三重県津市にある本山専修寺の真宗高田派に属しています。創建は永禄 8 年(1565)に僧了受がいたしました。

創建当時は何宗であったか不明で、十六世吞海の時、元文 3 年(1738)に真宗高田派に属し今日に至っています。徳川時代は大橋重政が寄進した 9 石余と片瀬川渡しの渡船料、水車の権利等で寺を維持し檀家も一戸だけでした。明治維新の際これらを全て返納したため窮乏著しく、堂舎も明治 3 年暴風のため悉く崩壊し、明治 42 年(1909)二十三世慶心が厚木の中古本堂を求め移築したのがこの前の本堂で、平成 16 年(2004)6 月に檀家等の協力で現在の本堂を新しく建築しました。

(5) 市指定重要無形民俗文化財 鶴沼皇大神宮人形山車 9 台

鶴沼神明 2-11-15 管理者 鶴沼皇大神宮人形山車連合保存会

昭和 63 年 12 月 16 日指定

a. 今年(平成 20 年)の鶴沼皇大神宮(神明様)のお祭り

例大祭は猛暑の 8 月 17 日に行われます。今年平成 20 年(2008)のお祭りは、朝から小雨がぱらつく生憎の天気、朝早くから NSK(日本精工)横に整列している各町内の山車は、人形を上げる 9 時には上げることを見合わせていました。当日、人形を上げ化粧幕を飾る最終の判断は、正午に人形山車連合保存会の会長が判断することになっています。正午になって、雨は上がっていましたが、今にも

降り出しそうな空模様のため、会長判断で残念ながら人形を上げ飾ることは中止となりました。それより先 10 時頃に小雨がぱらついたため、神社に近い 4 町内が参道の両側に立てていた 8 本の奉納の幟も降ろされてしまいました。参道に高々と幟もなく、華麗な人形や化粧幕が飾られないお祭りは、やむをえない事ですが何か淋しく感じられました。

b. 鵜沼皇大神宮人形山車 9 台

この人形山車は明治中頃から末頃にかけて、皇大神宮の 9 氏子町内会がそれぞれ製作したもので、三層式・総高 8m で華麗な人形と化粧幕が飾られ、又、屋台には精巧な彫刻が施されており、県下で最も盛観を誇っています。

昭和 30 年代までは、祭礼日に各町内から囃子の音とともに人形山車が集まって参道に整列しましたが、それ以後は、交通事情や電線に引っ掛かる等の事情で各町内からの参集が困難なため山車は境内の倉庫に納められています。

整列の順は昔から決まっていて、宮ノ前の那須与一、上村の源頼朝、清水の神武天皇、宿庭の源義経、苅田の徳川家康、大東の楠正成、中東の浦島太郎、原の日本武尊、堀川の仁徳天皇の順で、まず NSK(日本精工)横に勢揃いし、14 時半に神社参道横の道に整列した後、総指揮者の合図で宮ノ前の山車から順に境内へ一気に引き入れ、賑やかな囃しの競演となり、南と北のそれぞれの山車庫前に整列し、総指揮者の合図で南北双方から数台境内中央に出て山車を激しく回転させて参拝奉納する様はまさに壮観です。

この時、神社本殿では厳かに例大祭の神事が式次第に従い進行中で、最後に外に設えた斎場にて奉納する「湯華神楽(湯立神楽)」(市指定重要無形文化財—白旗神社神事)の最後のモドキの終わりと合わせ囃子をピタリと止めるのが「鵜沼のヒトキリマツリ」と言われています。

この素晴らしい華麗な人形山車は、現在作るとすれば一億円以上はかかるほどの高価なもので、これを製作した明治中頃の各部落には十数軒の農家しかなく、神仏判然令から神社崇拝の念も高く、皇大神宮への感謝と崇敬の心を表すため、例大祭を盛り上げようと集落挙げての労働の報酬によって製作献納されました。

この集落挙げての連帯感は今でも各町内にみなぎり、9 町内が一体となり百年以上にわたって「まつり」を引き継ぎ盛り上げてきました。

その甲斐もあって、祭りそのものが昭和 57 年に神奈川県「神奈川のおまつり五〇選」に選ばれ、昭和 63 年には藤沢市重要有形文化財に指定されています。

c. 皇大神宮人形出車連合保存会

昭和30年代終わり頃までは、町内に引きまわして巡行をおこなってきましたが、現在と違い砂利のでこぼこ道で長年にわたり引き回していると台車などの傷みもひどく、その修繕の費用捻出に各町内は四苦八苦でした。

そのような人形山車の保存、維持管理にかかる費用は、それぞれの町内会が特別に会費を徴収したり、寄付を募って苦心して対処してきました。

前記のように県からまつり50選に選定された後、市の文化財に指定された人形山車に関する要望（修繕費の補助）等、市の方では各町内会がばらばらで出しているという事になり、指定を受けた翌年の平成元年(1989)に、現在の皇大神宮人形山車連合保存会を、神宮の氏子町内会代表からなる皇大神宮氏子総代会の同じメンバーで立ち上げ、会長には氏子総代会会長が就任し、各町内会から出た全ての要望を会長が一本化して申請することになりました。

又、市文化財の指定を受けたことで、祖先から受け継いで守ってきた人形山車が公に評価され認められたと、9町内人形山車関係者は大層感激し、これを機に人形山車の保存、維持と、祭囃子の継承に一層努力しました。長年にわたり保存会会長を勤められた宮崎氏は会長を後進に譲った後、皇大神宮責任役員に就任し神社側の役員として現在も活躍されています。



又、宮崎氏の上村町内会の人形山車は、去る平成17年10月24日～30日に行われた、徳川家康が江戸に幕府を開いて400年の記念行事である「江戸天下祭り」に、東京都より神奈川県に人形山車参加の要請があり、県より選ばれた鶴沼皇大神宮人形山車9台の代表として参加されました。山車をそのまま持っていくは大きすぎて運搬が困難のため断念したとのこと。

会場は東京駅丸の内南口前の丸ビル1Fの大展示場（マルキューブ）で、筆者は10月29日に拝観しましたが、天井が高く広い会場に

「江戸天下祭り」の源頼朝 に関東各地から参加した華麗な人形山車の展示は壮観で圧倒されました。千葉の佐倉、埼玉の川越、本庄などのからの豪華な人形山車に遜色なく、ひととき高く際立って目を引いたのは、上村町内会の人形山車「源頼朝」でした。

保存会会長として一番悩ましいことは、当日の天候で、幟や、人形を上げた後に雨でも降ってくれば、幟は重くなって持ち運びが大変だし、乾かすのに苦労すること、人形と化粧幕は高価な絹織物や羅紗で出来ていて、万一濡らしたら傷んでしまい長く保たなくなるそうです。ちなみに、宮崎氏の上村町で平成元年に化粧幕を始めて新調したら数百万円もかかったとのこと。

幟や人形が上がらなければ、淋しいお祭りになって大勢の参拝客や見物客を失望させることになるし、とあって、雨でも強行すれば大事なものが傷んでしまう。悩ましいところで、はっきりした天候であれば判断は楽ですが、雨か曇りか判断が難しいときは、晴雨にかかわらず 9 時には NSK（日本精工）横に台車を山車庫から出して整備整列してもらい、人形を上げて飾るかどうかの最終判断は正午に会長が天気予報や雲行き等をみて最終的な判断をするとのこと。

当日の各町内の山車の参進、進行には、町内の進行責任者が当たり、境内での全体の参進奉納は全町内から選ばれた代表が高いところから総指揮を取ります。

9 台の山車は、指揮者の指図に従って狭い境内で一指乱れぬ行動をして、祭りを盛り上げていることは誠に見事で、伝統的な 9 町内会の結束、連帯の表れと言えるでしょう。

d. 鵜沼皇大神宮（神明様、烏森神社）

主祭神・天照皇大神 創建の時期については不明ですが、天長 9 年(832)に御社殿造立の記録があり、それ以前であることは明らかです。

第 60 代醍醐天皇の御代、延喜 5 年(905)延喜式が選進されるころに、藤沢市の内、藤沢、西富、大鋸、鵜沼、辻堂などの各地を合わせてとなえられていた相模国^{とかみこう}土甘郷の総社に列せられ、この時以来、相模国神明宮と称されました。又、長治元年(1104)に至って、鎌倉権五郎景政が所領の大庭荘を伊勢神宮に御厨として寄進したので大庭荘が大庭御厨と呼ばれるようになってからは、東は今の境川、西は寒川に至る地域、北は御所見から、南は海（片瀬の一部、鵜沼・辻堂・茅ヶ崎の海浜）に至る地域、いわゆる境川と小出川とに挟まれた広大な伊勢神領大庭御厨総鎮守と定められ更にあつく崇敬されることになりました。

寿永 3 年(1184)那須与一は屋島にて扇的的を射た弓一張りと残りの矢を奉納、併せて所領の那須野 100 石を寄進しています。

境内は 2300 坪と広く、樹齢 700 年のタブの木等の樹々が生繁り、その昔烏が群棲していたことから「烏森神社」とも呼ばれるようになりました。

4. おわりに

以上の文化財は、先人たちが大切に保存し守ってきたものです。私たちはこの貴重な文化財を次世代にそのままの姿で引き継いでいかなければなりません。

大橋重政の墓と江の島弁才天道標はいつでも見られますので、現地に出向いて確認し見て下さい、又、皇大神宮人形山車は1年に一度のお祭りで見ることが出来ませんが、百年以上にわたって9町内が大切に受け継ぎ守ってきた、華麗な人形山車と境内での山車廻し、賑やかな囃しの競演を、暑い8月17日の例大祭に是非足を運んで見ていただきたい。

(なかじま あきら)

(参考資料・文献)

『藤沢市文化財のしおり』 藤沢市教育委員会 生涯学習課編集発行

『文化財読本』 文化庁編集発行

『神奈川県文化財』 神奈川県教育委員会編集発行

『わが住む里』 32号 「江のしま道しるべ考」 伊藤節堂著

『わが住む里』 37号 「鵠沼の寺院考」 花輪 桂著

『週間人間国宝』 62号 工芸技術染織 「田島比呂子」 朝日新聞社発行

『週刊よみうり』 2003年3月 No.276 週刊よみうり新聞社発行

会誌 『鵠沼』 第37号 「空乗寺について」 大橋円明著

会誌 『鵠沼』 第72号 「鵠沼の古道江ノ島道を歩く」 川上恵久著

皇大神宮のパンフレット 皇大神宮発行

鵠沼郷土資料展示室 展示資料『鵠沼皇大神宮』 鵠沼資料展示室制作

『地名探訪』 鵠沼の史跡を歩く 第126例会 藤沢地名の会発行

取材協力

前鵠沼皇大神宮人形山車連合保存会会長、現皇大神宮責任役員

宮崎誠一氏

以上

相州大山豆腐塚

今井 達夫

相州は現在の神奈川県である。大山は阿夫利神社のある大山で、落語などで有名なあの大山である。正確には伊勢原町に存在する。しかし、相州という昔風な呼びかたの方がふさわしいのは、長い伝統のある故であろうか。もともと、随分あとまで相州という呼び方は生きていた。つまり相模国だが、今私の住んでいる鶴沼も神奈川県の代わりに相州で間に合わせる人たちは大正時代まで残っていた。

いつも郵便物に関して笑い話に持ち出すのだが、遠いアルゼンチンから相州鶴沼今井叔母上様という宛名で届いた私の従姉の手紙は、聞き手をうならせる。三井物産のヴェノスアイレス支店に赴任していた良人とともに行っていた従姉が私の母の正確な住所を忘れたのかどうか、とにかくそれだけで届いたのだから、昔の郵便配達法には頭を下げざるを得ない。大正の大震災以前のことである。

しかし、この一文はそんな郵政省を皮肉るのが目的ではなかった。大山阿夫利神社の下社境内にある豆腐塚に話は変わる。二十七日会東京作家クラブというのんびりとした友好団体があって、そのクラブの主唱でそういう名称の塚が建立されたのは昭和三十四年だが、その由来因縁についてすこし説明しておこう。「あさくさの子供」で芥川賞をもらった長谷川健が無類の豆腐好きだったことから話は始まる。彼は昭和三十二年十二月自動車にはねられて死去した。そのとき二十七日会の委員長だった彼をしのんでこの塚を建てたのだが、当時、大山阿夫利神社と結びついていた会は神社から建立地の提供をうけたわけである。あとまわしになったが、豆腐は大山名物のひとつで宣伝ではなくうまいと保証しておく。

つまり、そういう因縁がかさなってできた豆腐塚で、碑の上部に豆腐の形を載せた姿はしゃれた品格をそなえてい、豆腐塚と刻んだ文字を書いたのは火野葦平であった。ここでやっと火野が登場したわけだが、ことしになって彼の死が自殺であったと発表されて周囲に衝撃を与えたのはまだ生々しい記憶だ。この一文も実は彼を追悼すべく志したのであって、彼について思い出話を綴るのは若干の縁を感じるからである。

毎月二十七日に東京作家クラブは例会をひらいて会員の友好を温めるのが慣わしだが、十月にかぎり大山豆腐塚に参拝、その夜は麓の御師宅に一泊する例にな

っている。豆腐塚のできた翌年、昭和三十五年に福田清人前委員長の跡を継いで二十七日会委員長になった私はそれまでは一度も登ったことのない下社へ登る義務を感じた。なぜならば、その年の物故会員の遺品を塚内に収めることが決まり、火野、吉田両会員の遺品が運ばれていたからである。その行事について私は次のような文章を阿夫利神社で出している月報「大山」にのせている。抜書きさせていただく。

(前略) ことしは特に本年度の物故会員、火野葦平、吉田与志雄両君の遺品を、下社境内の豆腐塚に埋めることになった。(中略) 下の社務所までは幾度か足跡を印しているが、下社まで登ることに恐れをなしていた僕は、一度も豆腐塚に参ったことがなかった。(中略) 火野君の夫人の代理をかねて長谷未亡人とそのお姉さん、吉田未亡人とお嬢さん、足を痛めておいでの吉田未亡人だけは駕籠によったがご婦人たちの登る山に男の僕たちが登れないはずはない。(中略) あいにくの曇り空だが、途中不動さんの境内で小休止をしたとき、はるかな相模灘と江ノ島とが見えた。下社まで一時間四十五分登りつづけると、さすがに山気が迫って来る、肌を流れていた汗がずっと消え去りすがすがしい。豆腐塚に参拝、玉串を捧げ、名物の豆腐と冷酒に心持を洗い物故会員の冥福を祈ると、塚後方の山肌に霧が渦巻いた。諸兄の霊の来たり語るかの感がある。と思うと霧は消え去り、眼の下はるかな相模平野に日が射すのが見えた。さすが、山である。(後略)

二十七日会は二百人近い会員を持っているから、毎年の物故者も幾人かかぞえる。現在ではその遺品を社務所備え付けの大きなガラスケースにおさめることになったが、山上といえども湿気をつよい豆腐塚では損傷の惧れがあるからである。もっとも見えることを望む声もあった。尾崎士郎の徳利と盃のごとき、故人もあの世で人に見られることを望んでいるかと思われる好適な遺品である。

火野葦平にもどろう。

彼の自殺が新聞に報じられた直後その死を改めて悼む文章が方々に発表されたが、そのなかの寺崎浩のものなかに私たち夫婦のことが出ていた。寺崎の出版祝賀会の席上で逢った火野に家人を紹介すると、彼が家人に財布をくれたという話を書いているのである。そのときの実情はこうだ。

「こういう会に夫婦で出席するのはいいことだよ。大賛成だよ。」

そう言いながら彼は上衣のあちこちのポケットを探り、博多織の財布に百円紙

幣を一枚わざわざ入れて家人に手渡してくれたのであった。そのころ寺崎は鶴沼に住んでいたから、この話はすぐに彼に伝えたのを十余年経った今日でも覚えていたのだろう。

その財布は現在でも大事にとってある。その翌年、火野が急死したときも、ことし自殺の報道があったときも、すぐ取り出して追憶にふけた私たち夫婦であった。身近な友人でさえ彼の死を自殺と知らなかったというのだから、そこまで親しくはなかった私がただその急死を悼んだだけだったのは止むを得ないが、大山阿夫利神社下社境内豆腐塚前で彼の霊に語りかけたときの心持を思い起こすと、そんな予感、いや、そんな感じのまるっきりひらめかなかった不敏さが残念でありくやしくてならない。何かを感じても、そのときはもう勿論手遅れであったと言われればその通りであるが。

次の話は大山とは関係ないが、火野を思い出すごとにうかんでくるエピソードだから書きとめておこう。

文壇本因坊戦と文壇囲碁戦とは並行して行われているが、私も末席を汚していたころのことだ。文字通り末席にいる私は本因坊戦の方は出陣資格なしと自分で決めていて、囲碁戦の方の盤面に向かって相手を求めた。ところが、本因坊戦の方の顔ぶれがそろわず、幾組かすでに対局を始めているのに、火野だけがひとりで盤の前に正座していたのである。

「達ちゃん。火野君に打ってもらったらどうだい。」

そう声をかけて来たのは、これも本因坊戦で戦いを始めていた倉島竹二郎であった。この呼び方でもわかるように倉島とは学校以来の仲間で、住んでいるのも隣町同士、手合わせしたこともあるから、火野三段と打てるかどうか分かりそうなものである。しかし、強^よってのすすめで対局をはじめたが、二十手ほど進むと火野の表情が奇妙になり、私の顔をしばらく眺めていてから正座の膝を崩した。

「今井君、その石はおかしいよ。僕ならこう打つよ。」

彼としては辛抱できなくなったのだと思う。礼儀正しいいつもの火野葦平を知っている私としては、これ以上彼を苦しめるに忍びなくなり、わざと丁寧に頭を下げた。

「参りました。」

そして顔を見合せて笑いだしたが、これが親しくなるきっかけだったかも知れない。おくれらせながら、改めて哀悼の意を捧げたい。

編集部注

火野葦平の死は睡眠薬の服毒自殺だったことが死後 12 年経ってはじめて遺族によって公表された。次ページはその新聞記事のコピーである。

記事を要約すると

火野葦平は昭和 35 年 1 月 24 日朝 10 時北九州若松の自宅書斎で眠るように死んでいるのを発見された。医師は心筋梗塞による死亡と判断し、通夜告別式も病死と思いこんで済ませたが、直後に書斎の机の上にあった布表紙に「HEALTH MEMO」HINO と書かれた日記が見つかり、実弟と三人の子息がこれを読んだところ自殺であることが判明したという。

日記の冒頭は次のよう記されている。

「高血圧といふ厄介な病気にとりつかれてしまった。その記録をとっておく。これまで健康すぎ、無理をしたための反動にちがいない。後悔しても追いつかないが、これからは出来るだけ身体に気をつけ、すこしでも長生きするやうにしなくてはならない。昭和三十四年十二月七日 朝 あしへい」

だがメモは日を追って病状悪化を示し、死の不安をつのらせていった。12 月中旬の日付けには心電図が貼ってあり、1 月近くなると親しい医師に「小説の材料にするんだが、睡眠薬の致死量は何錠か。」と聞いたことも書いてあり、死の前日 23 日「死にます…」という書き出しで、健康不安と創作活動への自信喪失の言葉が 10 行ほど、最後は「さようなら。あしへい」で終わっている。

遺児たちは書斎を調べ直すと机の引き出しの奥から睡眠薬の空瓶が数個出て来た。「自殺だったのだ」とがくぜんとしたが、葦平の死ですっかり気落ちして寝込んでしまった祖母マンさんと母ヨシノさんの存命中は、このことを伏せておくことにした。三回忌のとき祖母が、今年 1 月 24 日葦平の命日に恋女房ヨシノさんが亡くなり、真相が公表されることになった。

火野葦平：小説家 本名 玉井勝則(1907.1.25～1960.1.24)福岡県若松市生れ。

1928 年 早大英文科卒。1926 年 丹羽文雄らと同人誌「街」を出す。

1937 年『糞尿譚』で芥川賞。従軍中書いた『麦と兵隊』にはじまる兵隊三部作で人気作家に。戦後、追放指定を受けたが 1940 年解除。

1953 年『花と竜』1959 年『革命前後』が最後。豪快で男性的な作風と「九州文学」の総帥として頼まれるとことわれない性分で慕われた。

酒を愛し、河童の絵が得意だった。

火野葦平は自殺だった

死後12年 遺族が初めて公表

遺書代りの「闘病日記」

祖母や母へ 遺児が真相伏せる



火野葦平の遺書（昭和47年3月1日）

火野葦平の遺書（昭和47年3月1日）
祖母や母へ 遺児が真相伏せる
火野葦平の遺書（昭和47年3月1日）
祖母や母へ 遺児が真相伏せる

まさか、信じられぬ
首かしげる地元の人
火野葦平の遺書（昭和47年3月1日）
祖母や母へ 遺児が真相伏せる

火野葦平の遺書（昭和47年3月1日）
祖母や母へ 遺児が真相伏せる
火野葦平の遺書（昭和47年3月1日）
祖母や母へ 遺児が真相伏せる

あの人をもまた
戦争の犠牲者
火野葦平の遺書（昭和47年3月1日）
祖母や母へ 遺児が真相伏せる

火野葦平の自殺を報じる
朝日新聞 夕刊（昭和47年3月1日）

なおこの原稿には「とうふ塚まつり」の案内はがき（往復はがきの往信）が一枚添付されていた。

東京作家クラブ二十七日会の十月例会とは、どんな集まりであったかがよく分かるので全文を書き写す。

表面

消印： 神田局 昭和 43 年 10 月 7 日 18-24

宛先： 藤沢市鶴沼松が岡三ノ一四ノ九 今井達夫様（ガリ版）

記事： 大山への交通案内

* 下社豆腐塚迄山を登る方

小田急新宿発 12 時 05 分急行箱根湯本行 伊勢原着 12 時 56 分

神社のご配慮によるバスあり

* 豆腐塚迄山を登らず阿夫利神社本庁迄の方

新宿発 14 時 35 分急行箱根湯本行 伊勢原着 15 時 27 分

伊勢原より大山までバスあり

* 尚、当夜は大山にて一泊の予定ですが翌日の予定にお差支えの方は

大山発 19 時の終バスに乗りますと 22 時 25 分に新宿に帰れます

* 又新宿 12 時 05 分発の電車で大山へおいでの方には、神社にて軽い

昼食が用意してあります

裏面

大山とうふ塚まつり（十月例会）

恒例の第十二回目のとうふ祭です。今年もまた安斎秀夫、一竜斎貞丈、内山順、長崎謙二郎、広津和郎、五会員の遺品を納める祭りとなりました。惜しい人々ですがそれぞれの葬儀には縁故会員が列席して見送りましたので、祭りの当日は満山の紅葉を賞でながら、賑やかに執り行いたいと思いますので、物故会員遺族はもとより、会員諸賢もなるべく多数出席していただきたいと存じます。

尚、今年は大山に因んだ清元「山帰強桔梗」（山がへり）を前進座の花柳照さんが踊って奉納して下さる予定ですから、昔の大山詣風俗を偲んで、ケーブルで一息の現代と比較してお楽しみ下さい。例のドライブウエーも既に不動前までは完成しましたから、自家用車の方は、不動前からケーブルに乗られると一段の興趣を添えましょう。

記

日時 十月二十八日（月）二十七日が日曜に当たりますので翌日に延期しました。

午後三時とうふ塚にて供養、五時半から宿舎でとうふ祭宴会

会場 大山阿夫利神社

会費 千五百円（奉斎料、宿泊料、朝食費共、但し交通費自弁）

（尚、今月は年度末につき、年会費未納の方は、事務局までお願いします。）

二十七日会 東京作家クラブ

振替 東京 62509

電話 (271)4630 9261

大山阿夫利神社の豆腐塚の場所

建っているところはケーブルカーを降りて石段を登り下社に着いたら本殿の向かって左側に「豆腐塚」と「豆腐の碑」とが並んで建っている。

豆腐の碑はダイヤ形の平たい板碑だが、豆腐塚は丸い自然石のうえに白い花崗岩をほぼ原寸大の大きさの豆腐の形に刻んだものがちょこんと乗っているユーモラスな塚である。その碑文が火野葦平の筆であったことがこのエッセイで明らかになった。また碑を囲む鎖を支持する石柱には東京作家クラブと朱書されている。



「鵜沼を語る会」活動の記録

(平成20年4月～平成20年9月) 総務部

運営委員会

3月25日(火)

11名出席

平成20年4月例会 4月8日(火) 10時～11時30分 15名出席

議題1 会誌「鵜沼96号」配付について — 出席した会員には手渡し、
他は配付表に基づき担当者に依頼した。

議題2 今年度のプロジェクトの進捗状況について — 各チームより途中
状況の報告がされた。

当日予定のカトリック片瀬教会見学会は悪天候のため、日をあらためること
とし、急遽渡部瞭会員に以下のお話で対応をしてもらった。

お話 — 「山本家とカトリック片瀬教会について」、長谷川路可とゆかり
のあるテーマとして、山本家にまつわる事柄および、近々に予定されるカト
リック片瀬教会と、その建物の様式および長谷川路可の描いた絵について
見学会の事前勉強としてお話していただいた。

運営委員会

4月29日(火)

10名出席

第22回総会・5月例会 5月13日(火) 10時～12時 23名出席

総会 — 中島副会長の司会により内藤会長、鵜沼市民センター松久新センタ
ー長の挨拶の後、配付議案書の審議を行なった。予算の中の「鵜沼ゆかりの文
化人の小冊子発行」については意見が出され論議した結果、今後運営委員会に
て詰め、逐次皆に図って行くことで了解された。それ以外は全会一致で承認さ
れた。有田副会長の挨拶にて閉会した。

引続き5月例会を行なった。

5月例会 — サークル交歓会報告、内藤千代子を研究されている嵯峨景子さ
んの講演(5月24日)について紹介された。

6月例会および見学会の案内がされた。

運営委員会

5月27日（火）

10名出席

平成20年6月例会 6月10日（火）10時～12時 16名出席

議題1 会誌「鵜沼97号」について — 編集の構想について報告された。
併せて、執筆者募集の展開をした。

議題2 その他 — 夏の学習講座のテーマ、9月の公民館との共催講座の
内容、公民館まつりの日程について報告された。

カトリック片瀬教会および新片瀬漁港見学 16名参加

例会終了後カトリック片瀬教会に再度集合し、日本でも珍しい和風建築の
教会のなかで、長谷川路可の描いた日本画の作品（十字架の道行き、エジプ
ト遊行、聖家族）を渡部瞭会員の解説つきで鑑賞。

その後、片瀬川に沿って歩き新片瀬漁港を見学。乃木大将像台座石も見学
し解散した。

見学記については今号の本文を参照。

運営委員会

6月24日（火）

9名出席

平成20年7月例会 7月8日（火）10時～12時 22名出席

議題1 学習講座（8月）および講演会（9月）について — 学習講座に
ついては、チラシの準備状況の報告がされた。講演会については、チラ
シの準備状況およびふじさわ広報への掲載決定の報告がされた。

議題2 会誌「鵜沼」97号について — その後の進捗状況が報告された。

議題3 今年度のプロジェクトの進捗状況について — 各チームより途中
状況が報告された。

議題4 その他 — 公民館祭りの展示テーマ案が提案された。

お話 — 「鵜沼のサーフィンと波乗り」について、内藤会長から明治時代
板子乗りから始まった鵜沼のサーフィン、戦後間もないころの進駐軍の人た
ちのサーフィン文化も含め、資料を交え、体験談も加えながら、サーフィン
にまつわる歴史の話をしていただいた。

運営委員会

7月29日（火）

12名出席

平成20年8月例会 8月12日（火）10時～12時 18名出席

議題1 8月開催の学習講座『阿部 昭の鶴沼風景』について — 当日の役割分担および進行の要領が展開された。

議題2 9月開催の講演会『江戸時代 鶴沼村庶民の弘法大師信仰』について — チラシ、ポスター、広報等PR方法について報告がされた。

議題3 10月開催の鶴沼公民館まつりについて — 8月の学習講座でとりあげる阿部昭関係を展示することが展開された。

議題4 会誌「鶴沼」97号について — 掲載項目の最終案が発表された。

お話 — 『思い出の湘南遊歩道』について、鶴沼郷土資料展示室で展示中の題記の内容を、内藤会長および渡部瞭会員の解説により見学した。海水浴場開設から122年の歴史、海岸の地形の移り変わり、ビーチスポーツの発祥の地、ライフセービングの歴史等認識を新たにさせる程大変興味深い内容であった。

学習講座 8月16日（土）13時30分～16時

会員20名参加、会員外22名参加

『阿部昭の鶴沼風景』講師島本千也氏（県立茅ヶ崎西浜高校教諭）

鶴沼で生まれ育った作家阿部昭と、その鶴沼に対する思いを作品に描かれている文章を引用しながら研究成果を講演していただいた。

内容については今号の本文を参照。

運営委員会

8月26日（火）

11名出席

平成20年9月例会 9月9日（火）10時～12時 23名出席

議題1 公民館との共催講演会について — 事前PR状況、準備状況が報告された。当日の準備についての協力要請がされた。

議題2 鶴沼公民館まつり（10月開催）について — 準備状況について報告がされた。

議題3 会誌「鶴沼」97号について — 原稿の集結状況およびボリュームが報告された。併せて、印刷・製本時の協力要請がされた。

お話 — 『藤沢メダカと鶴沼』について — 「藤沢メダカの学校を作る会」の会長である渡部かほり会員にお話していただいた。今や絶滅危惧種

になってしまった藤沢メダカについて、生物学的特徴をはじめとして、「見せる・育てる・増やす・広げる」活動をする組織の説明まで、「たかがメダカ、されどメダカ」を熱っぽくお話していただいた。

鶴沼公民館サークル共催講演会 9月27日(土) 14時～16時

参加者 131名

『江戸時代 鶴沼村庶民の弘法大師信仰』

～相模国準四国八十八ヶ所札所巡りの成立～

講師 ^{たまむろ}圭室文雄氏(明治大学名誉教授)

江戸時代の相模国準四国八十八ヶ所札所巡りの発生起源とそれにまつわる事柄について講演をしていただいた。

鶴沼村の人たちが高野山参りで投宿した塔頭の宿泊者名簿から、庶民も非公式には苗字をもっていたこと、高野聖が暦や薬の配付等庶民の生活に一定の役割を果たしていたこと。地元近隣の旧家に伝わる伊勢参宮道中日記に見られる見物・宿泊地から推察される旅の目的および経済的な様子。これらのことから、当時の庶民の暮らしは必ずしもゆとりがなかった訳ではなかった等、大変興味深い内容であった。

講演会としては、参加者も多く、質疑も活発に行なわれ、好評であった。

(文責 佐藤 弘)



編集後記

* 例年になく猛暑残暑でしたが、いつしか秋の気配です。

秋もやゝ夜寒になりぬ 我が^{かど}前に つづれさせてふ 虫の声する 良寛
* 鶴沼を語る会では、鶴沼育ちの作家として、内藤千代子、今井達夫、阿部昭の3人について取り組んでいます。そのうち阿部昭については、まとまった研究が会誌に発表されたことはありませんでした。

その阿部昭について、8月16日に学習講座「阿部昭の鶴沼風景」講師：県立高校教諭、島本千也先生が開かれた時に、先生から講座内容をまとめたフロッピーをお預かりしました。「作家と風土とのかかわり」という観点からみた阿部昭の研究です。今号ではその前半を掲載しました。

又10月18,19日、公民館祭りの展示にも阿部昭を取り上げる予定です。

* 6月例会の後、カトリック片瀬教会と片瀬漁港の見学会が行われました。

教会内にある長谷川路可画伯の宗教画を見るのが主目的でした。その見学記を綿谷克延会員に書いて頂きました。

* 中島明会員は「鶴沼の文化財」について執筆して下さいました。当会以外にも幅広く活躍されている中島会員に、かねてから書いて下さいとお願いしながら、編集の都合で延び延びになっていたものです。

* 「長谷川路可伝」(下)を掲載、これで完結です。トータルすると60ページにおよぶ力作でした。長谷川路可という画家の全貌を見事にとらえています。渡部瞭会員の熱意には敬服するばかりです。

* 今井達夫遺稿。今号は、火野葦平の死が実は自殺であったと死後12年のちに新聞報道されたのを知って書いた追悼文で大山阿夫利神社の豆腐塚の由来と葦平の人柄を偲ばせるエピソードが綴られています。

* シリーズ化してきた「鶴沼の歴史的建物をたずねて」は世代交代による土地細分化、あるいは老朽化による建て直しなどで候補物件がどんどん消滅していきます。また、お住まいの方の都合で見せて頂けない場合もしばしばで、今号でも取り上げる物件がありませんでした。シリーズの終焉を検討しなければならない事態が迫っています。

* 今号は、うれしいことに綿谷会員から、久々に中島会員から原稿を頂戴しました。編集部としては、執筆者が偏らぬよう出来るだけ多くの会員に書いて頂き、より参加意識を高めて下さることを願っています。

* 余白を埋めるカットの絵は不肖私が描きました。

(岡田)

『鵠沼』 第97号
平成20年 9月30日発行

本誌の記事引用の際は
ご連絡ください

編集・発行 鵠沼を語る会
藤沢市鵠沼海岸2-10-3
鵠沼公民館内
電話0466-33-2002

URL=<http://kugenuma.sakura.ne.jp/>